



二十四輩順拜圖會

後篇
陸奥出羽
下野 四

待
八波4
1810
10-9



八波
1870
10-9

陸奥

會
會
會

親聖人 御舊蹟 二十四輩順拜圖會後篇卷之四

目録

○陸奥之部

宝池山蓮生寺

福徳康若寺

養純比丘け松

甲斐守 白ヶ

堀本 志系山

名久川 志成が辻

○出羽之部

冠蓮のる像

若水山若澄寺

象 瀧

如來山浄論

明恵上人の傳

阿比山 志の山

阿比山 志の山

阿比山 志の山

阿比山 志の山

阿比山 志の山

阿比山 志の山

阿比山 志の山

阿比山 志の山

澄性上人一族成辨之感

石の庄の 白川冥阿武隈川

佐美庄司の城跡

武隈明神 志の山

日 松 志の山

石森山 志の山

岩手山 奥の志の山

りり山の 志の山

志の山

志の山

志の山

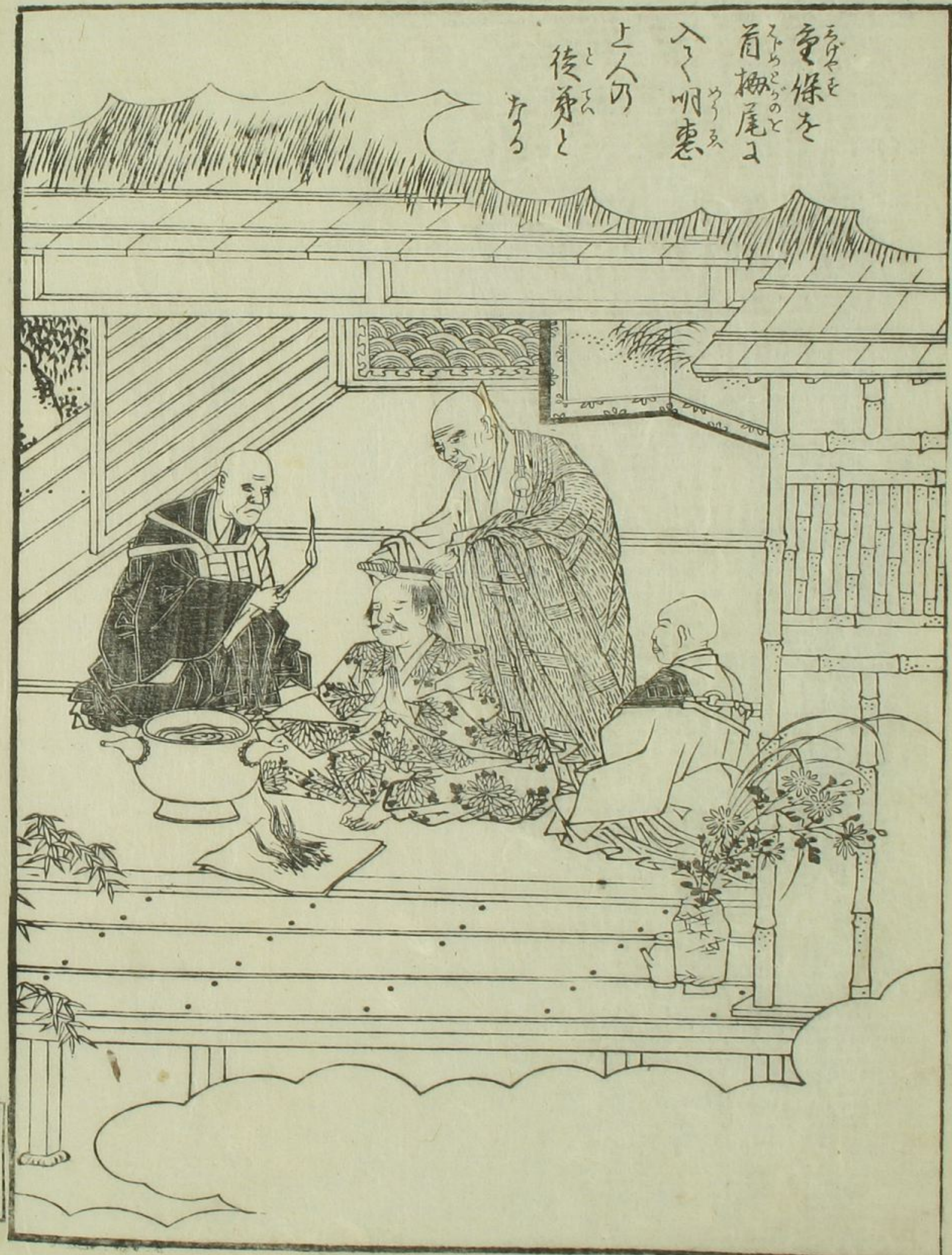
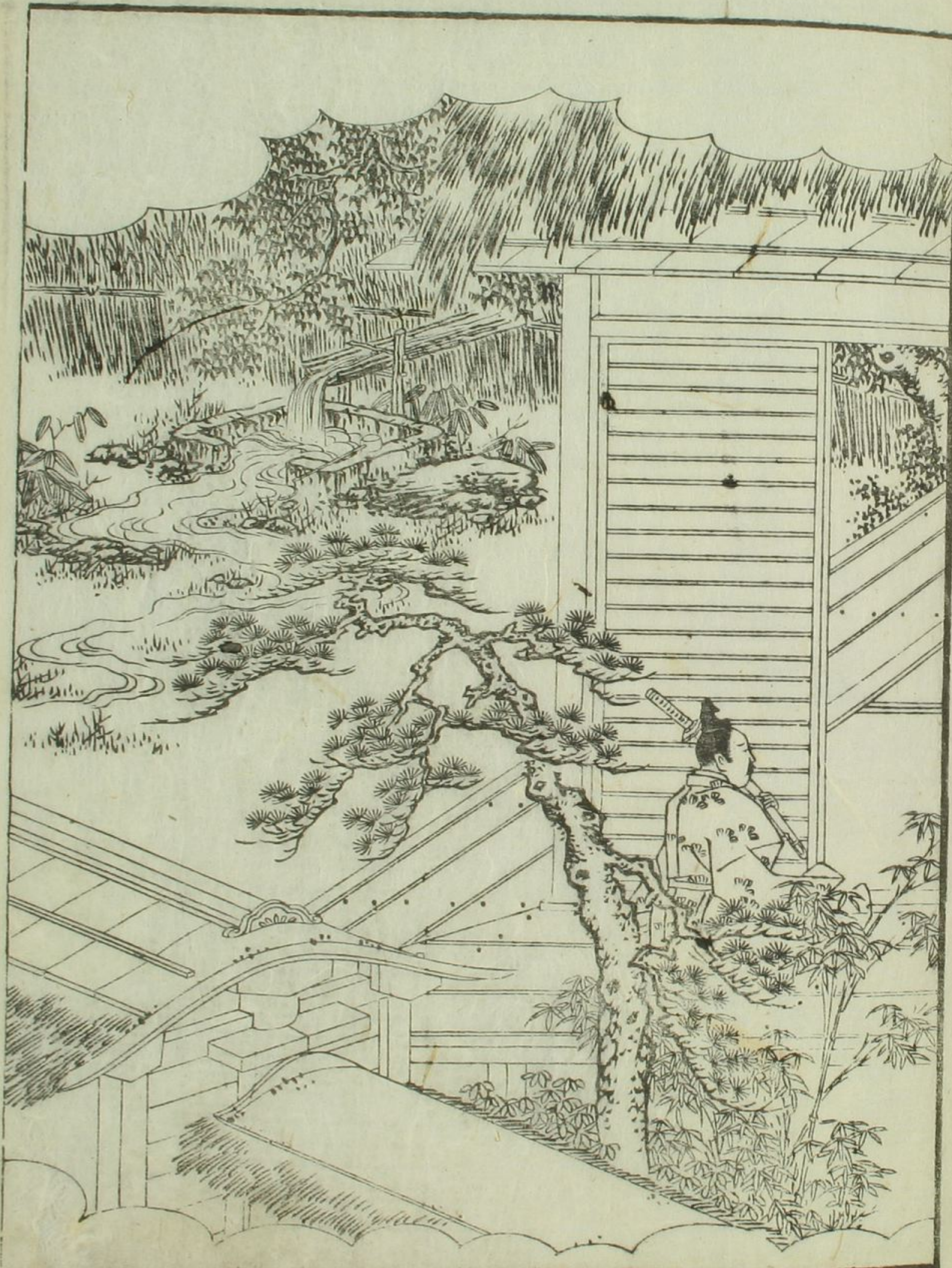
あさ
朝倉
蓮生寺



後四ノ

日く討死せしは流布せし密を遂て来師のや極尾明表
上人の禅麻と叩き人間の不定芭蕉泡沸と多しく枕中武門のらら
夕あしを期とくはびさるそり今度我父重忠舎見重保を始一族即
多さあつと命の死をいふは我其子牙の死して命と云きあう
福根株既と盡て誰一人善提を訪りりよく一類の鬼鬼と云く
悪報と墮落し修羅の妄執教との期と云はしは乃の我一人或と善
提のふよとて私を出離のるんまのひ竊は法味瓜あまして是まの推系
せり阿より上人又表大恐をされ終ひ因駈の道を疾し終りと涙とふかこ
りしが上人いと殊勝のりと思し終ひ即崇つたれ華嚴一乘此法と惡勤
又終し終へ重秀執喜踊躍と云は利發深衣乃身とかり名も惠空と改め
上人は法從し善提を勤るの志源切なりかくて年月を積つて聖乃の
難分苗且と修しかく園林の一条容易悟得し終り終ひ惠空といはる

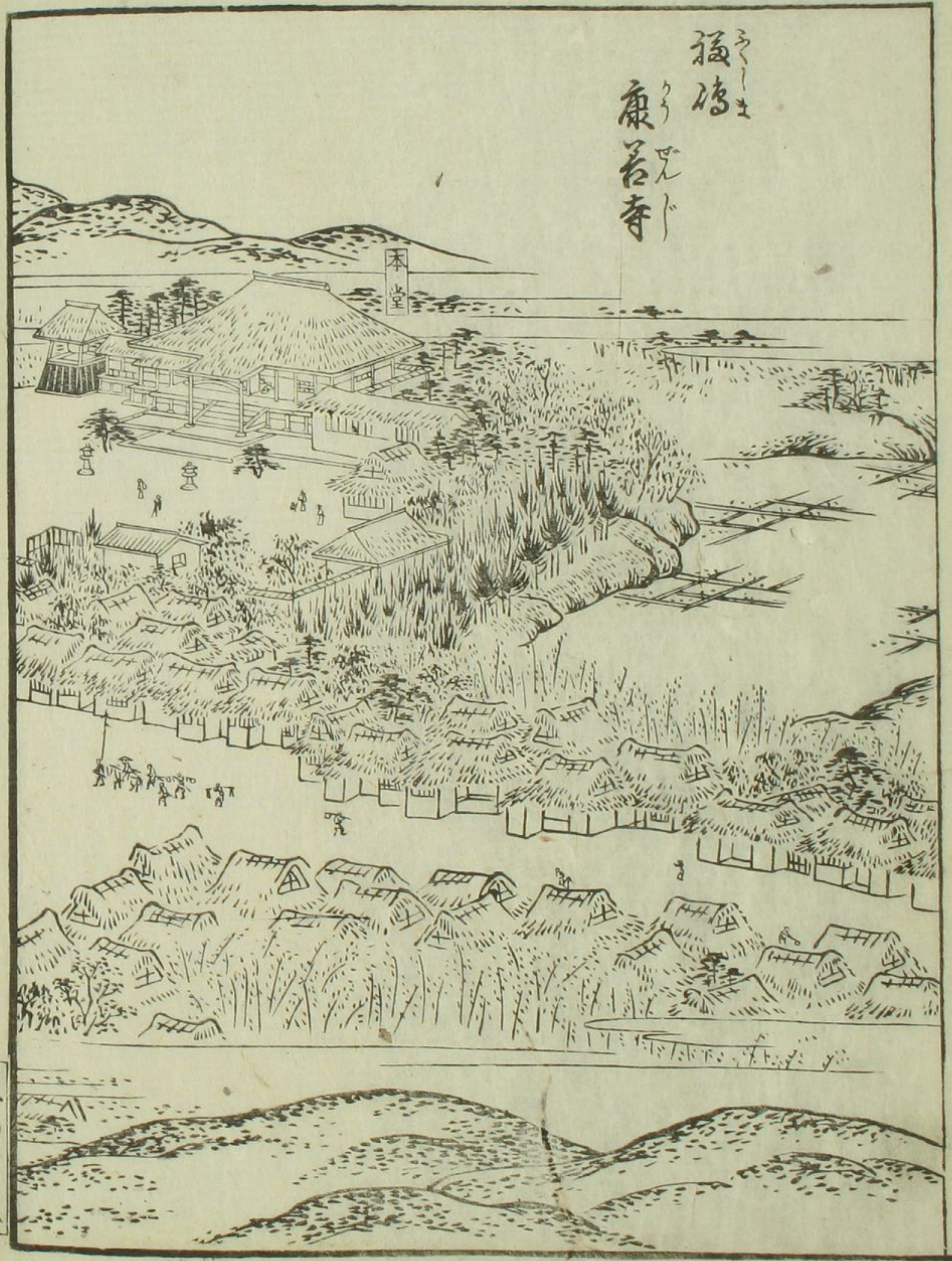
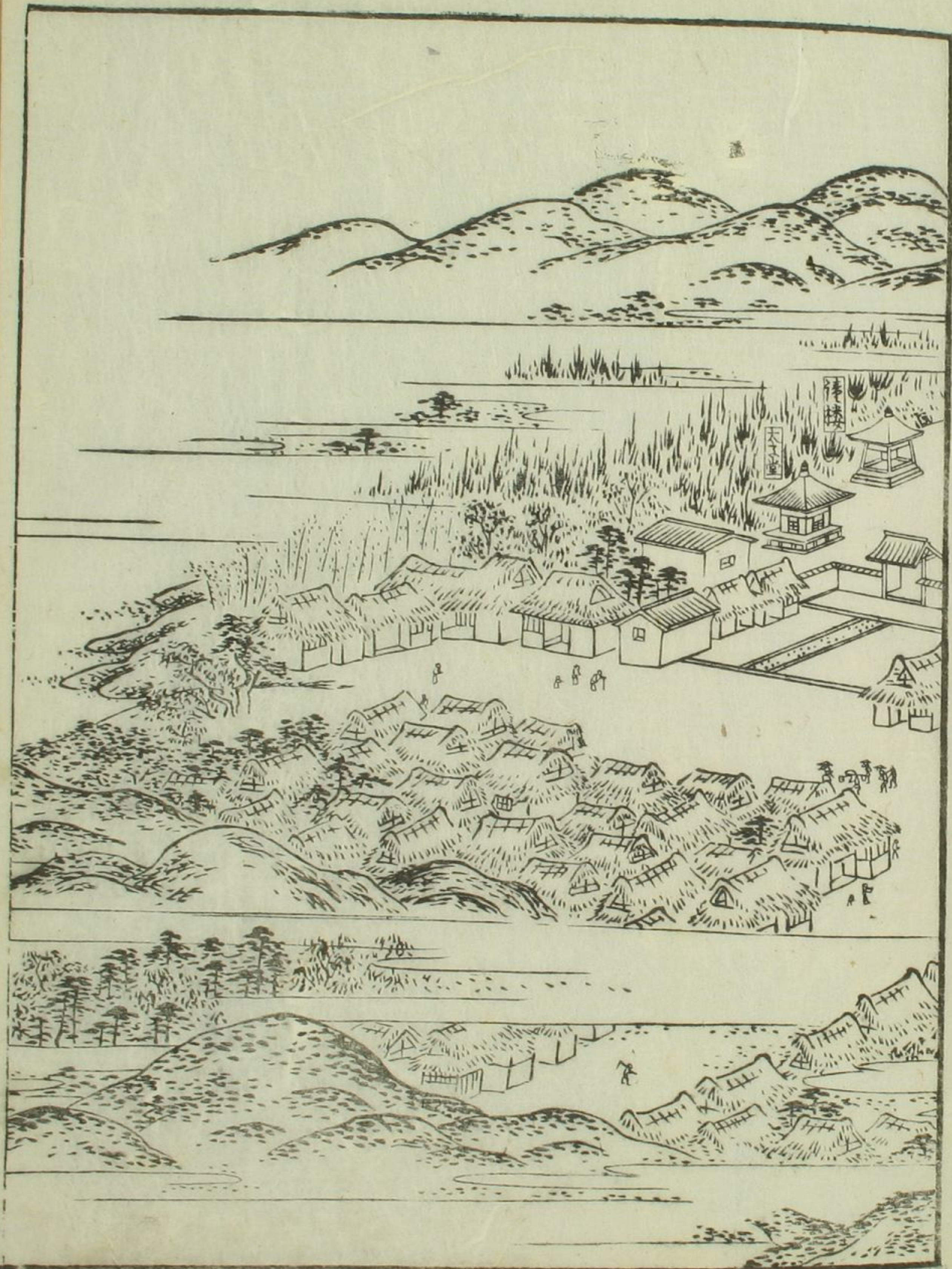
らく人音長とる不ありて乃又負の業を強て云んとせば五百奉と經るも
終は其甲斐あまらば終るをいんや人間より六十年今己は其才に及ぶ
千歳なり阿の奉をなてかきりなき此終と修せんといは是より思なり
一我きく今東方又他力真宗とて易終直入の法盛んは終りよはま
は速又先ははとて乃兼元二年十二月二日まは夜ふたふ山と志の
ひ出楽語にしてりりろろが宿縁の法くさうや此附高祖寫聖人常法の
圃小終郷弘法はしくはれは直は彼至三就聖人の淨刹と終流
表をいふと物くう作ぎ終らうの善提の要路と云き終へと渴仰のけ
しき源うりしう聖人奇特の志いとはは終ひま今や末世濁乱の凡まいうで
う聖道の修終を成就とるを得んまは自力功德となすは地力本報
の如来と打ちまうせなりて難若餘終をよりとて一向は報謝恩徳の名号を
唱渡し終修終念なり阿の彼佛力不可思議の利益廣大なりて自己の往





澄性上人
一族威佛の
相と感徳
に

佐世



後
徳
康
若
寺

本堂

後
四
八



られ井の
 何さく
 人を
 ちんりの
 解



采女山の安
 の什と置て
 王の如う
 を解く
 ぬ
 ぬ
 ぬ
 ぬ
 ぬ

佐々木河城



まうけのゆきさきまうけのゆきさきまうけのゆきさき
 赤ぬらんとせしよ未女なりしのかくくも御前をさくくも
 りして王よとちまひつせしり夜は

あまう山うげええぬ山り母のちとくの人をらんまのうま

とつしゆよそ王の御心さけく凡波たぐもこのいささくも
 け何さう山乃そ秋の秋の父母の中うそそむらふ人の
 貴さうさるのちまひつせしり夜は

○何さうの酒はくく林の村あり八雲村ありまあま
 るいひごてたり彼國は富浦はしよんくたうくと入日よ
 うつての藤あり

○信ま山まのぶの里まはのううままま日本方り

後人ままはるくくまのいまの山りまの音の眼ありたり

○譯後瓜次あり杉バ枚田の宿名産の瀬石あり二本松の宿西の山
 あり此石の地地の城ありく甚繁たの地あり

○安達系に二本松の遠傍あり黒塚とく茶しゆれ中又柏の本
 今もや瓜とのもま

お道いさつたのうがらう系乃黒塚とく鬼こりまらまは

義経
腰け
松



○まのぶどうの石の海邊の山はあまの川に流るの正のわたりかたの山の
 中より其のまの山紫よりと執事苦むせり或人のまをたらし
 此のよりよりまのまのぶどうの石をく見ゆしなりしは園司より命
 ありて今さらまをえたるやさん何とて多雨ならんとも又理
 しからしとちや流る其流るまをまのぶの石のむじまのづ
 よこそ

○枕後庭の丸山の古塔の石の流る上川より見まの山
 ○作達の本戸の流の上の山龜より坂のちれあり先即文治五年
 神戶を即赤樹討死の古跡なり

○やいとの園の本戸よりまの山
 ○あけまの流のまの山けきまの山けきまの山けきまの山
 ○義経腰け松の本戸よりまの本戸のまの山けきまの山
 のわたりはまの山けきまの山けきまの山

○甲冑堂の本戸の山けきまの山けきまの山けきまの山
 甲冑と着せし本像と安ん
 ○白石名産の紙ありまの山けきまの山けきまの山
 甲冑のまの山けきまの山けきまの山けきまの山

甲冑堂

貞操をまりの
のこちうひみう
其武を失ひど
つうへの石洞
女大まは
これ敷とや
いふかえへ



○この町の関は大河系のゆゑあり

○柳の本々つりれ関より山阿の山は又つるふ本方り毛そのりうに於朝奥州征伐

○武隈明神又竹駒明神ともい柳の本の東山岩洞の宿れ西より信長は

○因法師奥州秋枕のちうり神臺竹馬よまきり出現ありて徳園と回音

○いより神号よぶり又宝窟山竹駒寺ともい密宗の社傍あり是即徳

○因の雨基方りと其信用いざし竹駒武隈の訛語あり其説え

○武隈の松武の二本の松いんまこれ松ともい明神の傍二丁むり武家の屋中

○よあり山石のあはれつる岩洞ともい村昔阿武隈館ともい山國の山守居

○俣へ流る石方り源満仲源寺に及原元良播道貞友永範永源若義永信

○徳敏は俣たすいともい即この松元良任國の附枝流る石方り後再隆興

○寺と下向むつる附の秋よ

○其後若義任國の附枝瓜をさう人のおとく毛と伝く樹よりけらしとて其

○徳の枝ひの申よ寺のい跡さう今河石乃樹の後人の植るをたして其名と

○なすり流る石と根幹の古き方に又百年のものに及いびりりし七人のあま

○して地と二尺身より二尺はまらん実元として天は年へ枝葉茂る繁茂り

蕉翁
東奥よ
糸脚に



描き通
松田氏作

いけくまに松の二本を都人いづくや見本とて人
武隈のまらむけを依りまゝとせと經てや我の妻ぬらん

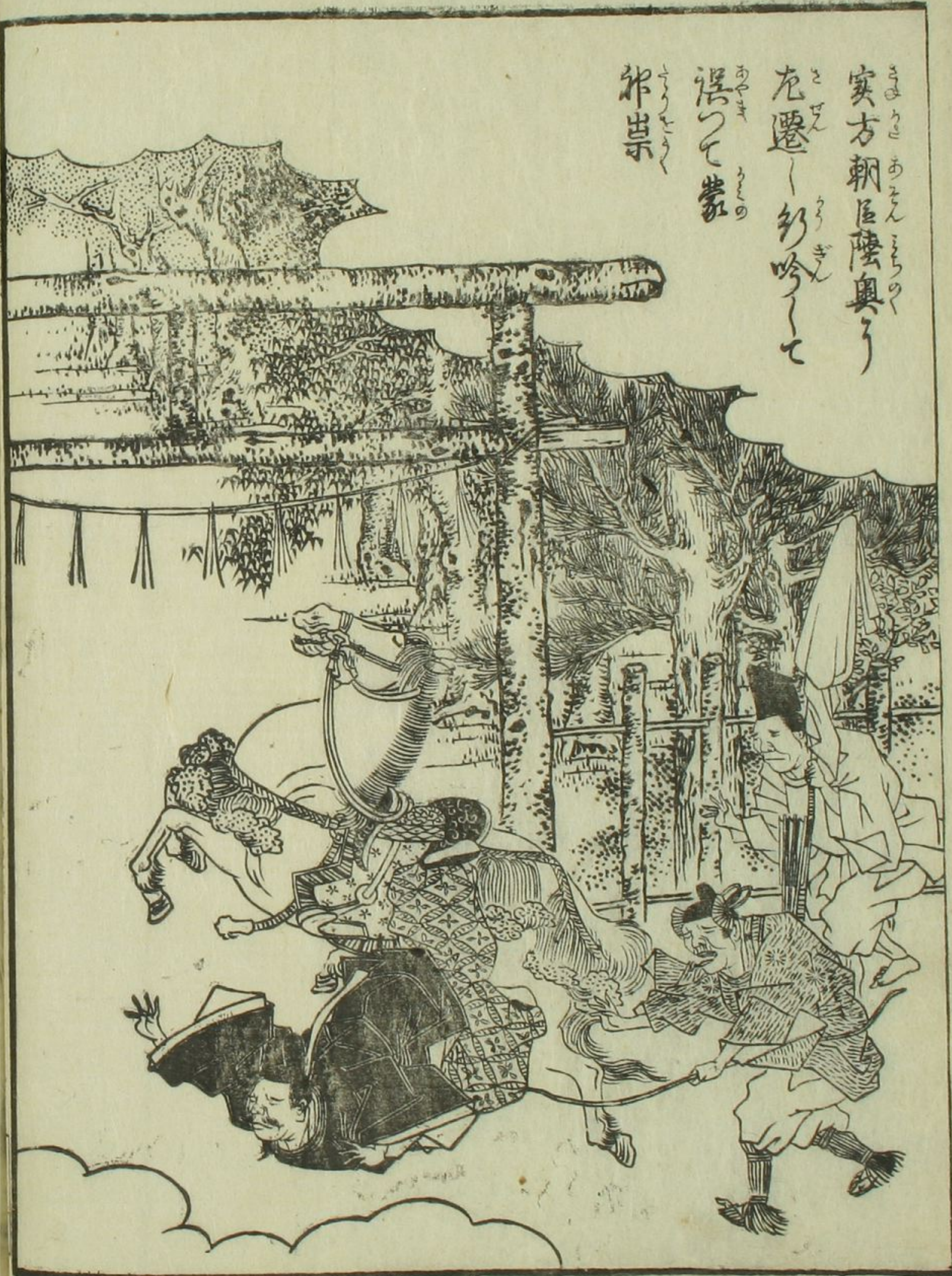
○芭蕉翁の碑の岩派より一里をうり西芝ととるる松花の名をありて其の中
一里其文云

笠崎の里よ入るに夏中お実方の塚にづのわとやんと人よと人の先より
有るも色る山きその里をとのま笠崎とらふる波津の中へ流るるの
今よありとゆけとらの天月雨といとつらつられゆれ余はさ
唯中てとるるま義論筆よまはる月雨のおもふれさりと

一里一ままいづこま月のぬくりこら

○夏中お実方朝臣の塚に有るはるごとく義論の里笠崎る波津の社を
うし海へはたふたあり其地を伏文山とて又唯砂書とてうりまの
先中おまふふまうらんしとて書と惟り流るるをとのふりうりまの
の所へあり即塩出山の麓なり又中お住持の跡とて塩出村の
氏代く去去流るる者有りて彼塚と身もお祀者のゆをつるまのそ
家にもく種柄なる種書読中れしものを修表は先即中おのり訓
相成なりとてまの松のわたりまのりまのりまのりまのりまのり
柳中お実方朝臣の一條院の朝よらて大納言の松とて日附のりまのり
武隈のりまのり論をて糸脚の冠をまてお押さるる糸脚のりまのり

実方朝臣陸奥
 左遷一幼吟して
 撰つて蒙
 神崇



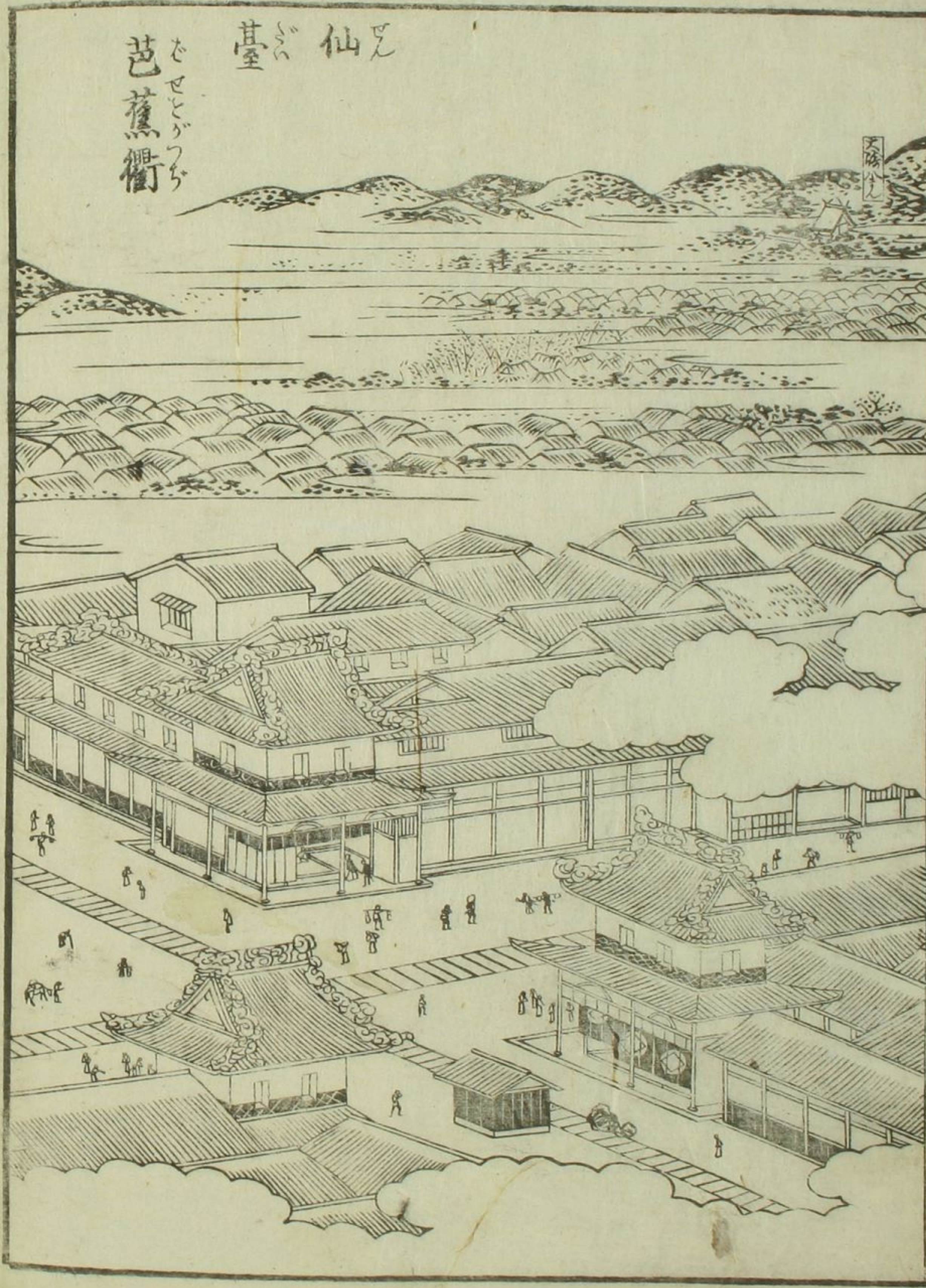
温柔の入りたる其まゝ冠をとりあげ發りきりあげてと何れぬ所も
 てまされしを帝道と敬覽はしし幼成の優美を賞し一方の蘇忽を
 要し幼の實方こそ其秋まうして来るべしと陸奥守に任せらるる東奥の
 阿つやの松を賜ひ得り其附界殿許とて一即附と勅命ありし中お心
 をうけしとらつてこれあつやの松の本をくまへて入るることをたす此地は
 さまよひ幼のいごけ石の石祖神の物ごころ一終入所神をいりり
 是といふや馬河はししとていひまゝと元來武骨の殿うれい耳よりいひ
 用とて幼終入やうを華表の若にあらやいなる石とて石の馬蹴入り
 自ら大地とてとちら馬の其まゝ倒し置ん神罰のわざとせし「きかて里
 人きこまぐくは痛りか」はきまゝせたるは三田たうりまゆて終は長徳に奉
 十月十二日申齡又十又歳うて玉養の汀をるるよあまきり都路のむろそ
 淵終入里人きこりれとまのせ其法よかたをりれまはしをらん終なきたが即
 今何の石の台候なりとぞ西の法陣未園幼脚りおらう一墓若に類きて
 「橋よせは其名をうりてとら並結ばし」はかこことぞかんば
 〇名は川大河なり往昔橋の長と百二十間ありとぞ中おの塚より五又欄よ
 出終神堂を経て東の方よりひく此地は名は乃女とて若あり無歳紀
 傳の終神は清とてその多奉なりしが若て且やうらゝとて志願終はひはし
 うんといひ此は母ひて祠を立ててこれを勅信し終神をうり即今ある石の



昔これありて名を川の祠とて
 陸奥よりとてなり名を川の祠とて
 右幕下朝神戸泰衡を退任乃れ
 一ありとて名を川の祠とて
 とありしは橋原景時よりあり
 君も海とて名を川の祠とて
 〇恒本の阿武隈川がよき合せぬと其のさだかを見たりとて「名を川の祠」
 中田より久る地より今も恒本とて流し出たりあり人たましくこれを得て
 是を流し出たりとて「或は香炭は」してこれを香炭とて名を川の祠
 故一本理あやまると其の賢王の
 名より川流くのりて本阿武隈川とて名を川の祠とて
 此川より長岡驛とて阿武隈川へ出たりとて名を川の祠とて
 〇恒本山仙臺ありて巖壁絶壁として削成とて「是よりなり」往古神仙の窟
 はして耐く仙人松鶴とて松鶴とてやれり地名仙臺とよぶとて
 此地の繁茂なり人家のほぎしく「きまは帝都とて」
 〇芭蕉が過つた所のけしきも此地名をきれのけしきとて名を川の祠とて
 の形も芭蕉とて枝つきて其根樹ひろく夏天下は緑系街欄といはるる
 其昔ありとて名を川の祠とて



佛子十二圓
 縁と親む
 又安否の
 とうまきよ
 確とく人とも
 承く人のし輝
 又ほえく
 地の名に
 とうまび
 えやせは
 子殿うて
 尚橋きん
 気よゆひてう
 まれ芭蕉の
 松柏は橋
 とうまのを
 一紙



芭蕉閣
 仙見
 臺

綾和稱念寺

西流

日國宮城郡仙臺府 國分町あり

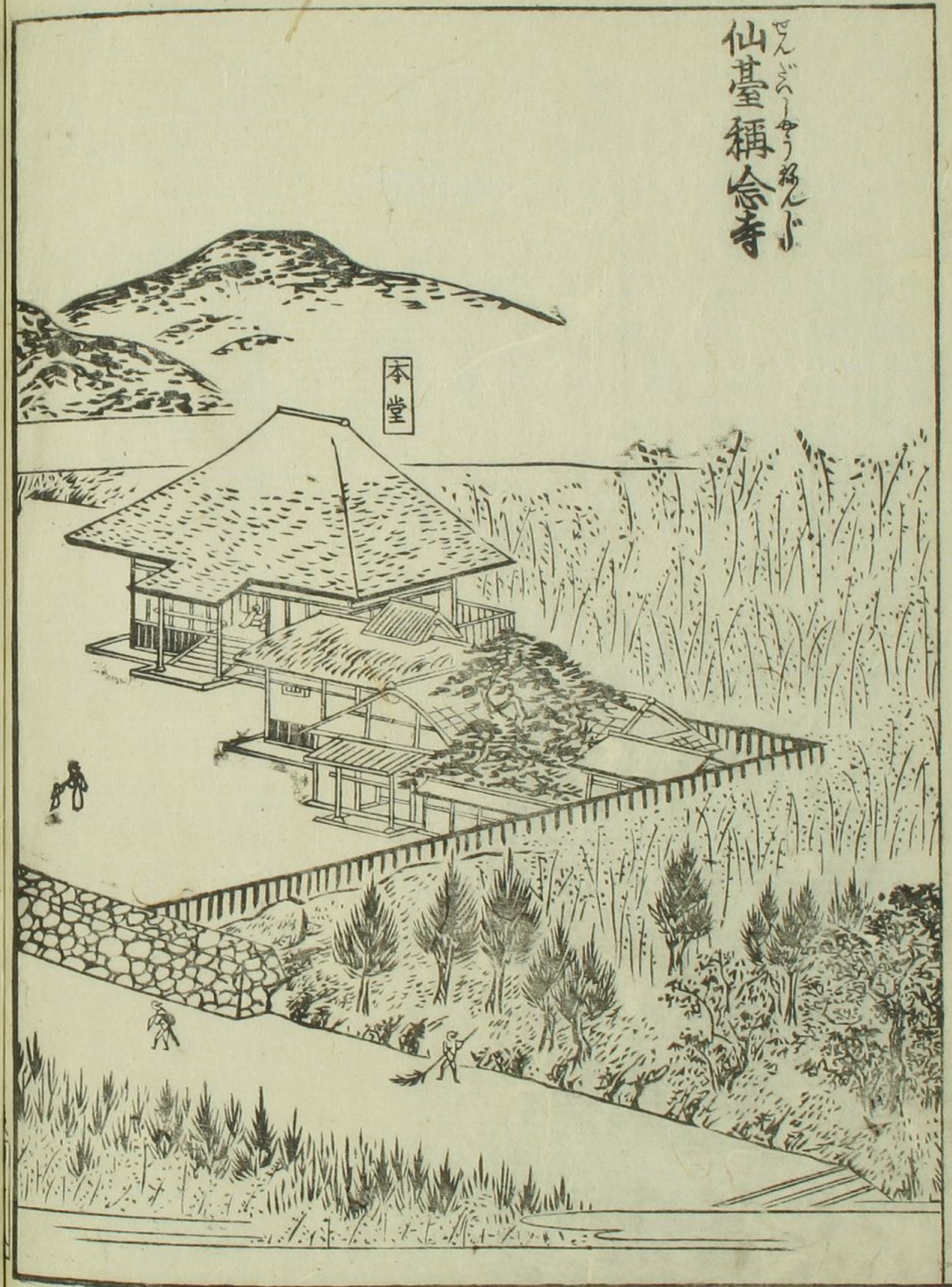
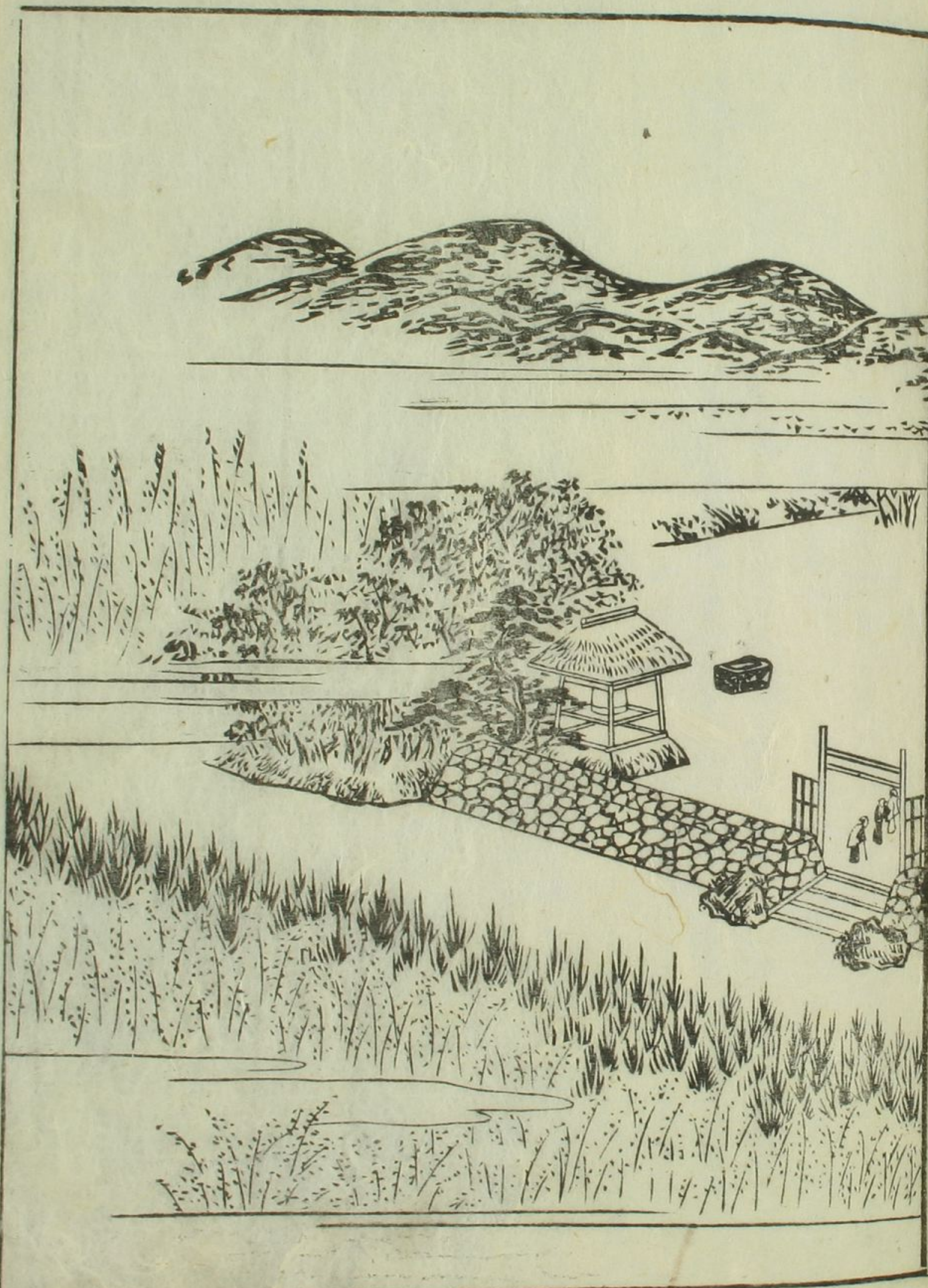
二十に輩第十一番鸞聖人上足無る信大徳説法利せむ
跡あり 其後見心光園源海尊定

うんとおついで法慈を設け化益ありし石の霊場

元以地を山經流と云く出流の橋山山本松院と号して用基を信房と云り人三十三
代般達天皇に世の苗孫を長橋満足と云く流の系流國邊の城を橋民部が稱是なり常州
福田と号して聖人の所を并り國國は化益一統弘基三年三月十八日法勝八十一歳なりて地
ををなれと云く其後無る信寺の系下道跡橋の信元りこれを核と云く俗姓の流系入飯の
多層と云く翻經なり
未何と云く其對と云く此

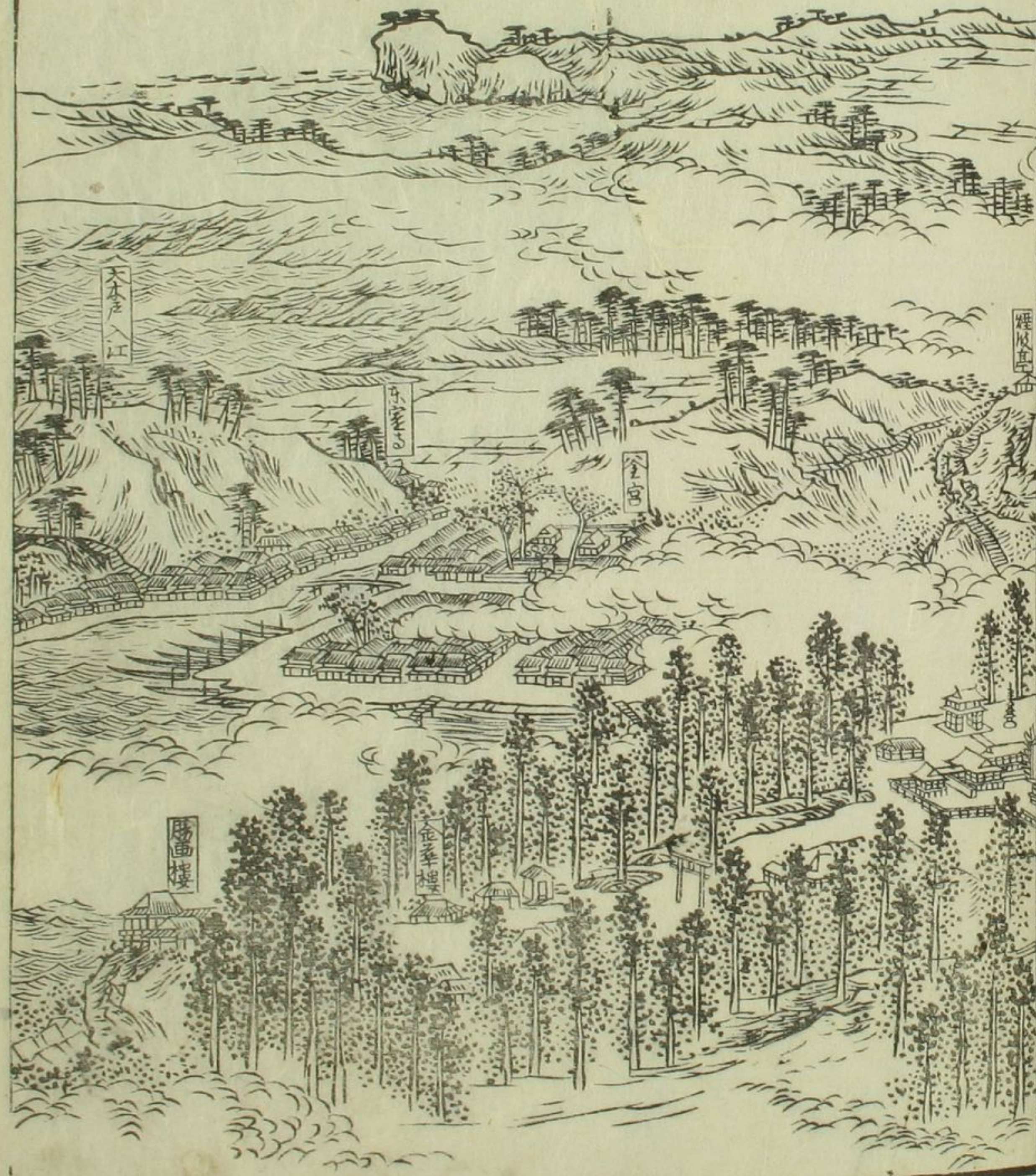
○官城郡國分町より東方躰躰が圖を云釋迦をより南へ國分寺のじろと
石一歩の石の廢墟是なり此社の名物なり此の本社と云り今其本社
とて流たれは唯其種と云く仙府の人家に培植して二株と云るの
なり○秋萩の石核は咲る花と云るはと云る秋を或人難と云る小と云く
此萩の石核と云く官城郡の本萩なり本萩は何れに云るは此の本
なり秋毎に摘みまき核をせじて其核は花咲けりこれと云くまきの
あり此本萩ははつかりと云く○むらしの藤は萩と雲と云るののあり

る仲方の人奥州の任と云くそののりと云く府此萩を長根十二宮と云りて
る系と云く入るる日人の手と云く是と云く二系大流と集りてはひく車と云く
まきと云くまきと云くまきと云く花の今むらしのありと云く本と云くは萩
小松と云りありて萩を云く此
官城郡元何れ本萩露と云く風と云くと云くと云く
尾より流たれはと云く二石あり小鶴が池神田の玉川流流橋末の松山と云く
石と云く名勝と云くと云くて石を八幡通りと云く其迂回なり又原町と壺の石牌へ
お直と壺電へと云くを捷徑と云く小橋が池と云く多と云く驚むと云く居て人と云く
其奇観なり
○壺の石牌の系町より今市と云くと云くろきの橋奥の細ろと云く終て此山と云く十
の菅蔭の古跡あり石甚まうり石牌へ石と云く流たれはと云くと云く
蓋道末大路の傍に南都の墨匠古梅園方り若標石を建て人始りてるは
と云く大流より右の方地徑へ入る方九又平の瓦屋あり是即石牌と云くと云く
壺三尺と云くと云く三尺寸満國への石徑を記と云くと云く六丁を星の標り之と云く
城の碑と云くと云く昔神龜元年甲子按察使法守府の軍大押朝臣と云く
滋と云く其後天平宝字六年十二月末海節及後兼法守府の軍大
惠美朝獲城と云くと云く碑石と云くと云く建毛様人をしてるはと云く
と云く見雲真人の号と云くと云く風と云くと云く田村の軍法守府にして國分町の



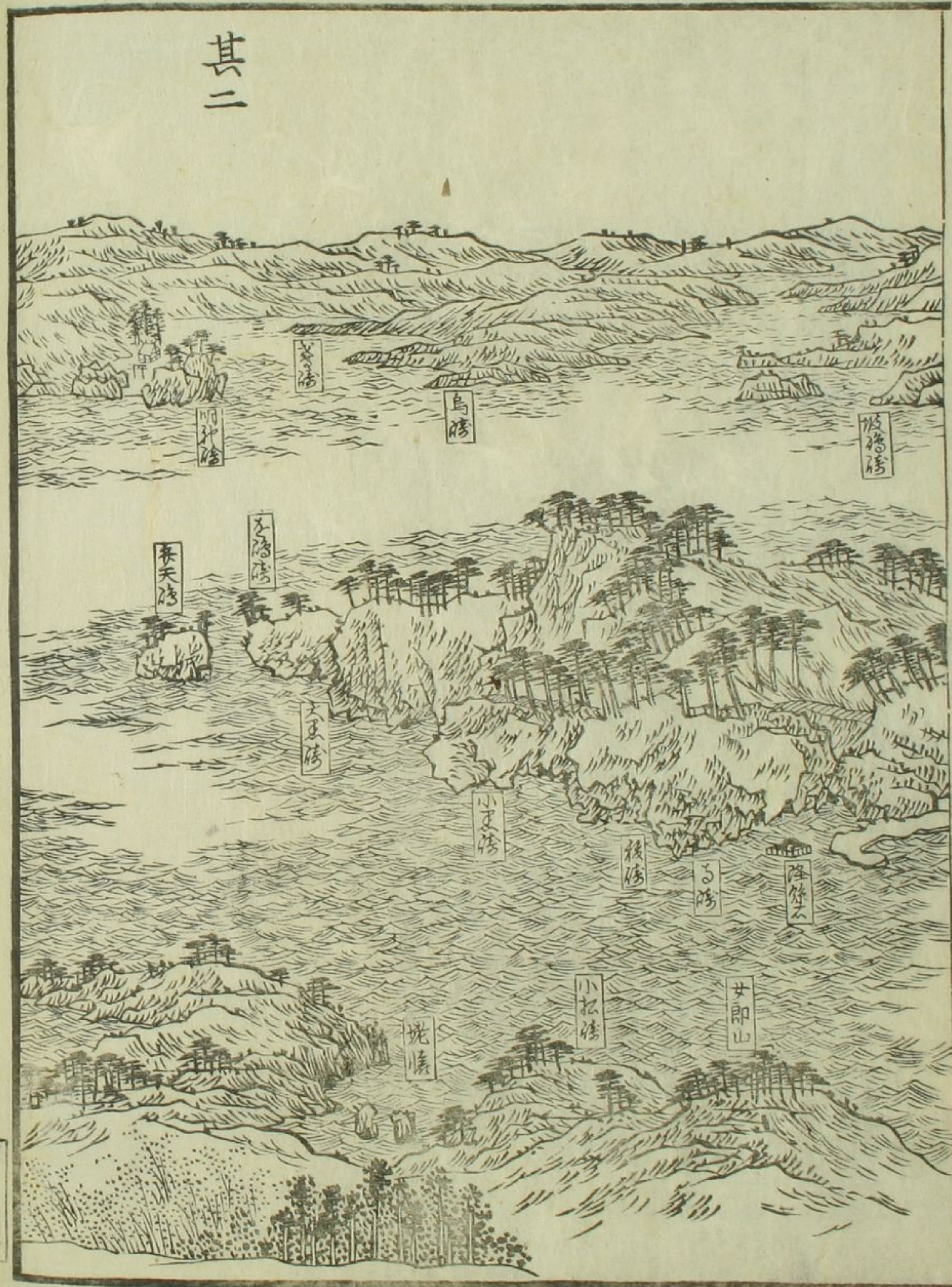
見まじやうなふ
仙臺稱念寺

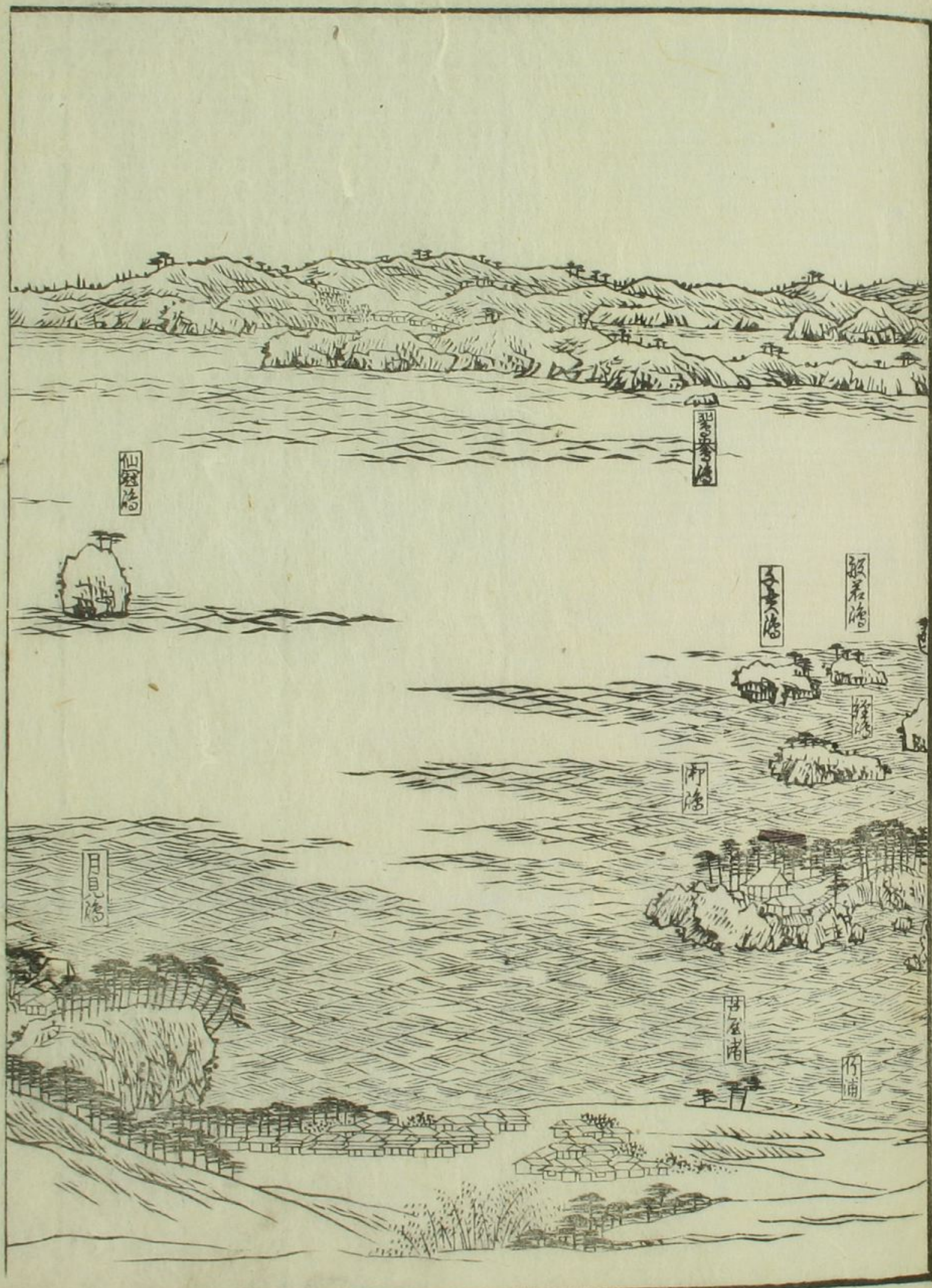
其一 松尾全図



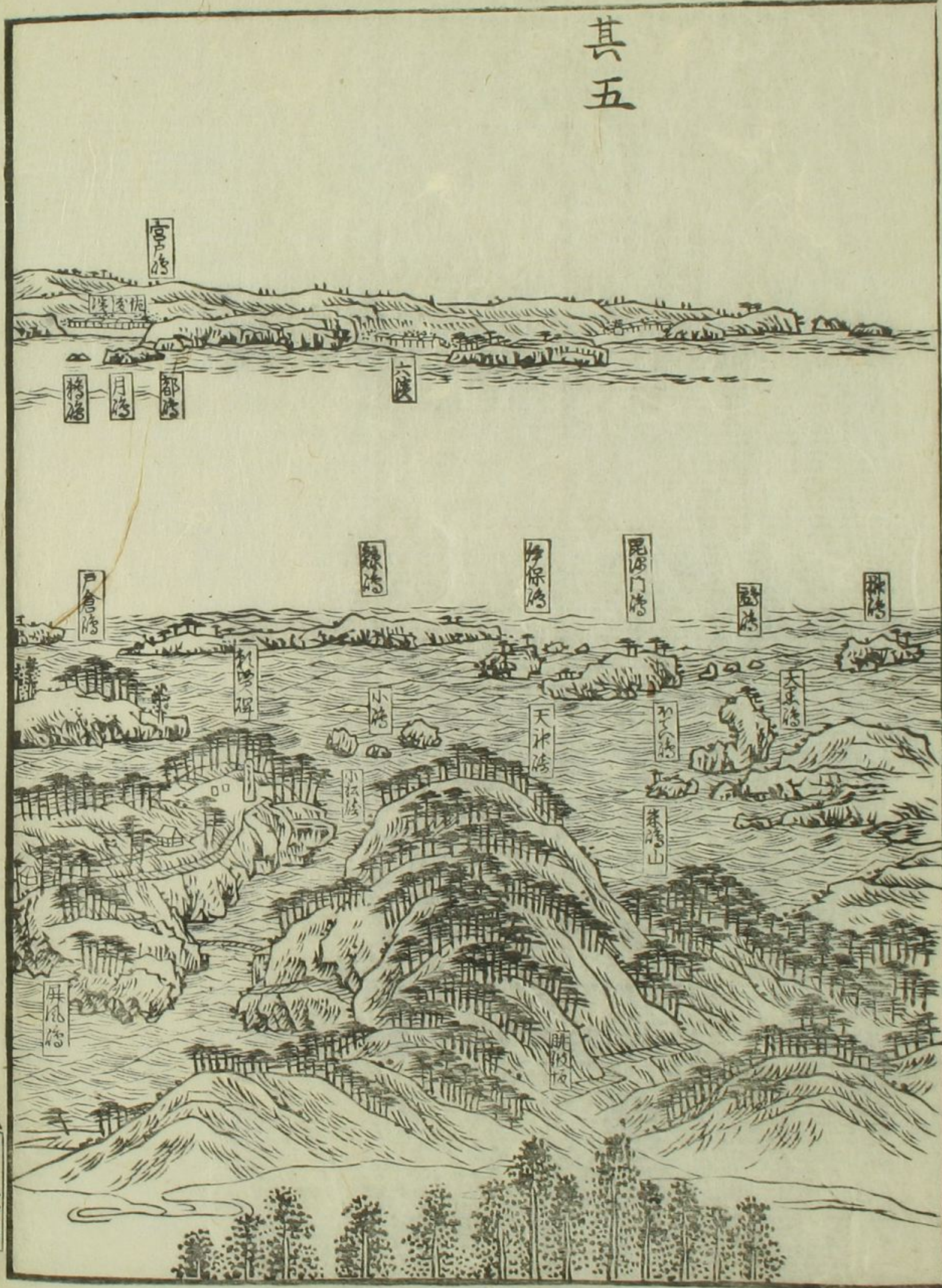


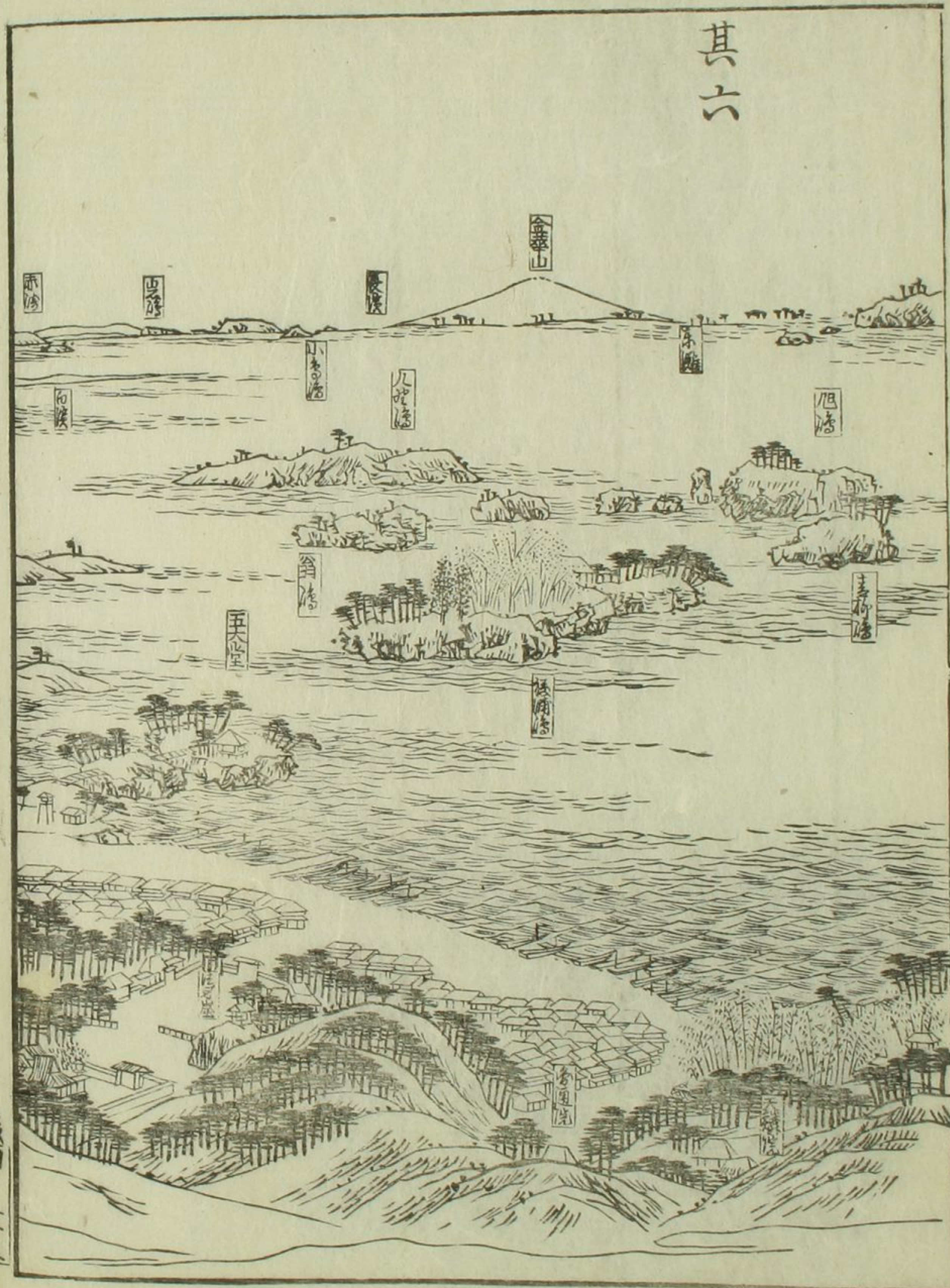
其二





其五





開基なり

秋より北まがたが海を渡るをいふにあらはれ陸金 瑞岩寺に松崎寺と号し法身和尙と号す常州長壽寺の同
平に即ちなる武まをりしが子の不遇を感ぜし出づる遠世く終
入海し鐘山の室窟に若くはるる十一年降朝の後最明寺に附
し降依せらるる山を開基とて其偈云

遠登往山分月 還披因縁大道場 法身遠得無一物 本是真磔平に即

方丈庫裏の塔構凌子の画に附附の名工をききし令殿樓閣きらびや
又十三の塔臥臺をたぐり枝殿いん方な。法身窟の熱門のそらる月
見勝ありこれ若くは明寺なる諸國の脚のたぐり危難を避らば
や其後後想國師此窟中より抄して天台止觀を講説と云。雄勝一御
勝も月本武蔵の松をよせ終へをてつひつをの上妙美房の見佛
上人の開基なり。松崎和尙の碑あり文のひききし元僧寧一山の松
不之。松崎庵日雄崎あり芭蕉の碑と云其石面

朝よとを多きまのしませ行り海

えせと

○西の松梅まらしまり仙臺へ入りはあり又西の松梅まらしまり
其況俗に述されば開基なり

○燕澤の碑仙臺と松崎の同あり其文字首畧あり。漢若孫なり
修ん云弘安に年夏元人我國に依せしと記し忽記し十乃軍兵の
さうく西海に沈没せし其は降化の傍孫舎因是寺の開基佛光
禪師我父母の園方をみてこれをいふ。其は秋彼岸の日此碑と
きて亡年の霊を吊らりてとるなり。我朝あり其末をい
らまれば文字を首畧して人よと記しりたたりや

○金華山の松崎のあたりにあり海濱にありと記し。難不之不謂らるる乃
く山は金華とていひ。此山山乃る。小持禪師。其年釋之。鐘
て石巻より此地奥海の一都會なり。又是より何よりして海濱に
あり。終に相川の山とていひ。此山石令華山。其年の海はなり。海
海の舟一艘のきり山上より小舟一航ありて是と可く先まらるる
とる。此の嶺上の鐘を鳴らし相國をいせば即彼なり。其の鐘
を撞く其後松をいふを女人を撞く。書六ツより海濱と終に山に
地より鐘二百丁より海濱にあり。其の鐘の響天外に響へり
其歌令く龜の脊に蓬萊を負ふ人。其の鐘の響は仙のなり。托とる
高に十八丁。三十六里八十八谷三百八十丁の洞窟あり。頂上の天龍宮か
東南の方後海とて難不之をいふ。八角の水晶石あり。高廿周は日
十三畧とて。此山第一の奇觀なり。又此海底の産物。金海龍金砂を



即歸海をどまりてあけな知識の値遇をりらるる或疾曉又及んで石
思議の靈爰あり喜夜の童子枕上よりうらて唯何とまく

一 坤へ善信の聖世又出て常州の法乃のまをく

とくうへくく三及まぐ吟トつづくともちくうせまの信明

忽ら善信の信を法くくくと歎の心を素どる心を一すれまの聖

とは真名をなきて善信聖とん又ときいとは此常陸國とまなり

善信聖人との大知識はしくく末世の衆生と教守はし終ふとのふ

靈者なるべくと感涙をろまをゆのみまご夜ふれ又立出く常陸

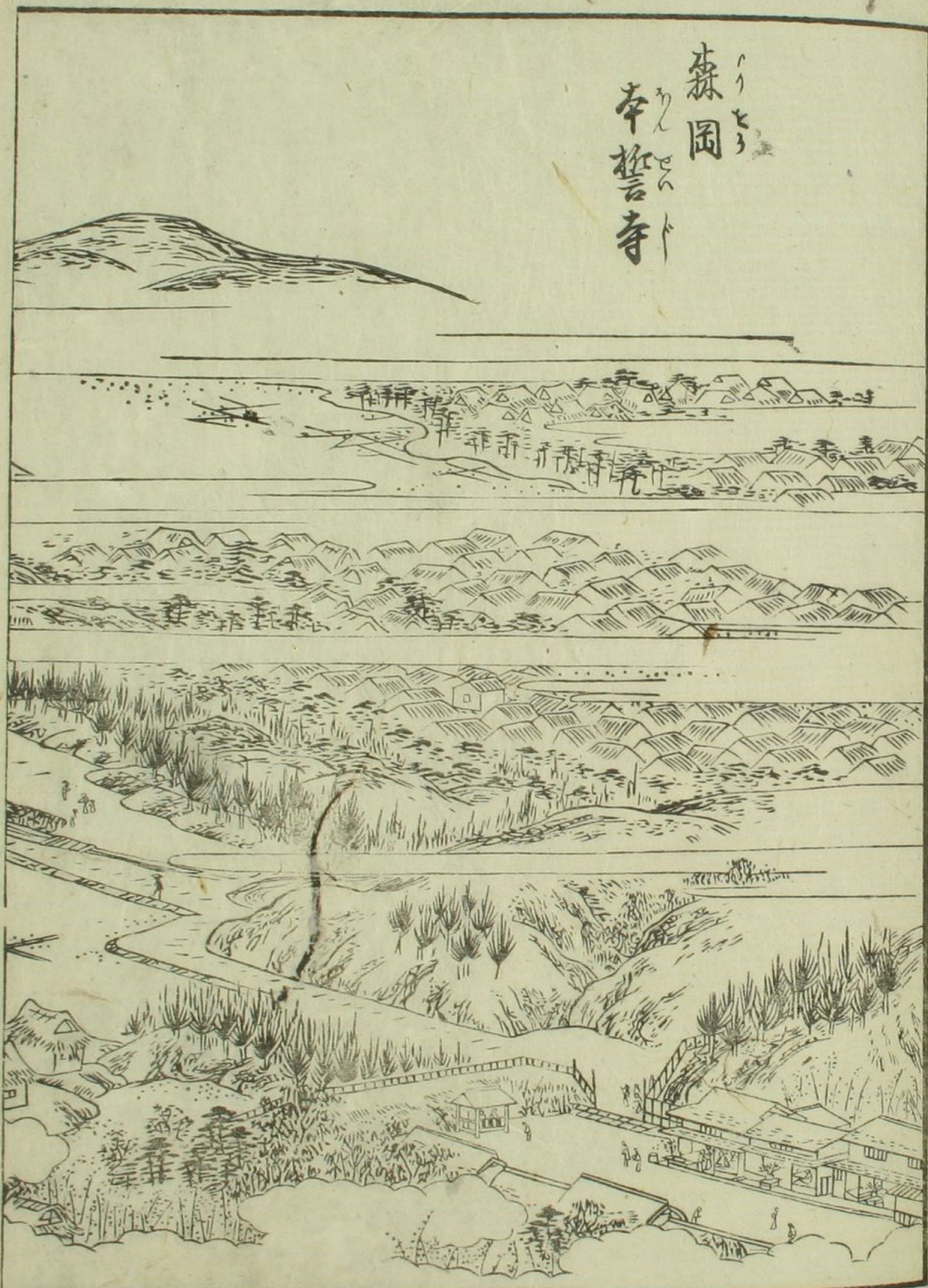
こそい終きたり先即信明が宿因縁達の附なるみや靈者にまうせて彼

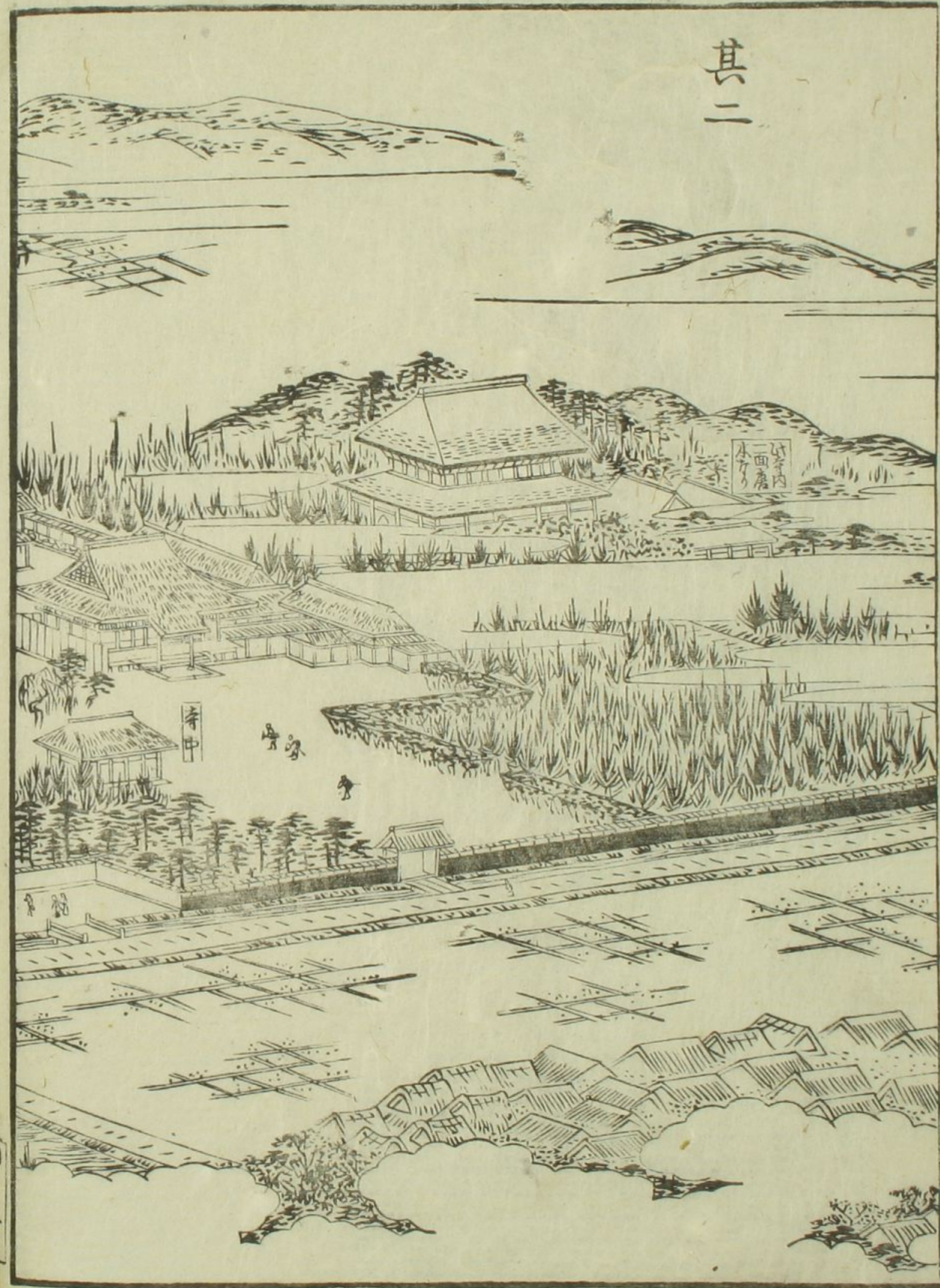
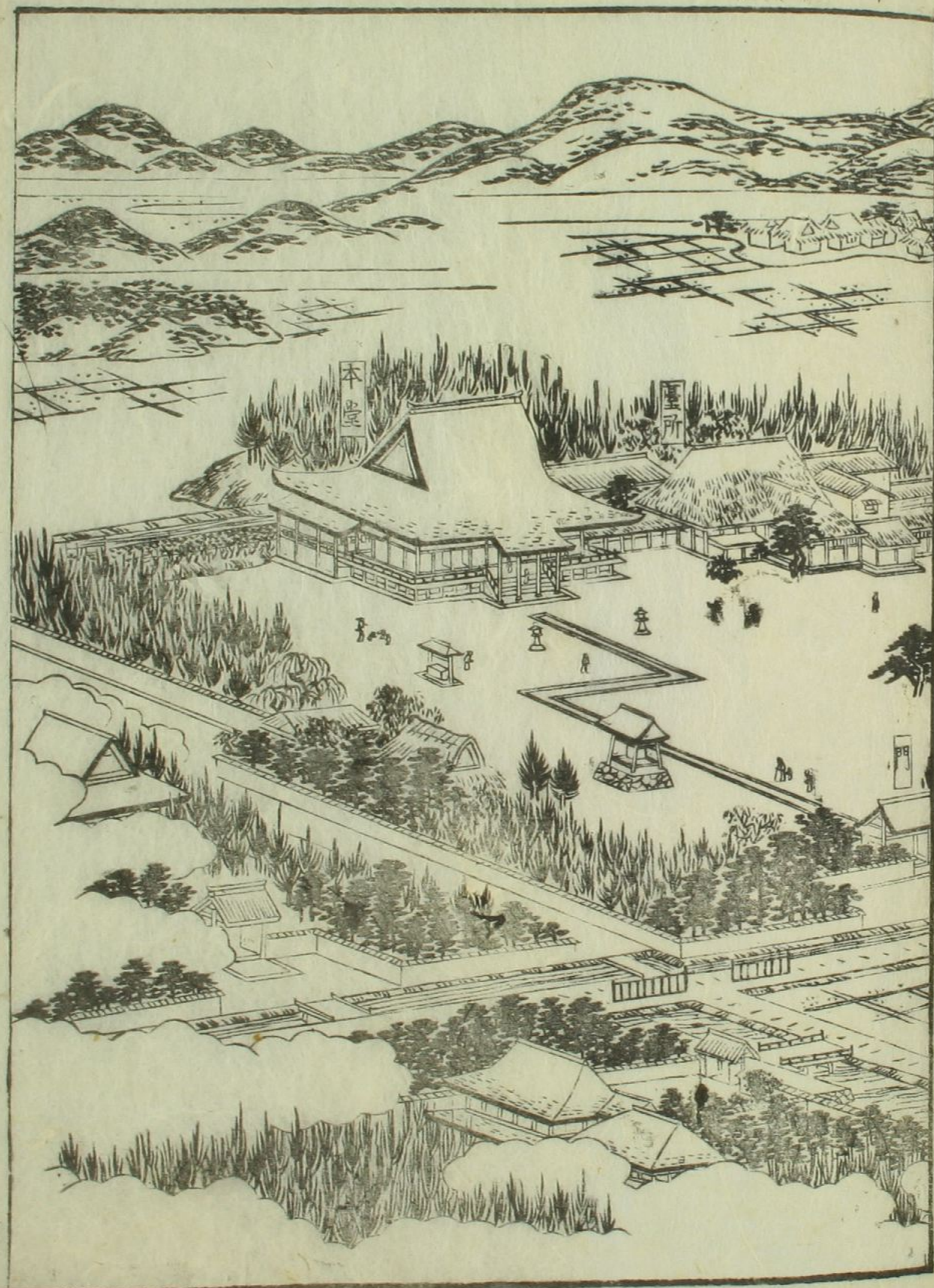
地より易防ふよ里人とも善(る)其善信とやけい即親密聖人の

御事よて今程い近き此小碓の郷はしく専ら弘法教化をる

終い識よる難き知識よて人皆如來の御再誕とこそやけとといふ

森岡
本誓寺





信明いよく奇異れりとははしあま小幡の里より聖人は得て
そ何れ大誓の悲願して我々ぞんたの凡愚をい出離のるまいたか
終ひ門下れ事席よりはし加へ終りまじと渴仰の涙りちしは
ろふ聖人も渠が慈心一朝のりやうごる成かんと終ひ則ち願地力
の要法専念稱名の正業をのへ末法五濁の悪世よめていま終り下れ
別々又若悪邪正の隔りはし生死の患難を助らんやう自力聖道の
善境よてい永劫を經るも及ぶやはしあま又終り下れ唯一篇
凡愚の衆生をうて淨土よむ久終りんと万機普益ののりうれ唯一篇
よ阿彌陀佛の本願力よ歸命よなりしよ又終り下れ佛恩報謝の
殊名忘るやうくんは淨土よ往せんと大地よあてまのささるが
とて念ぶるよ教条何れせ終り信明既喜れ涙よむせび何れ難や希や
悪業煩惱の此をよまよ一向よ歸依よ地力よまうせなんは此き助けあふ

ちる御本願いうでうたのよあせざらんとい即信心獲得せうは御
弟子の列よ加へられ法名とも是信房とぞ賜りたり終り下れ
且又用法の利益を蒙りたるよ聖人は降して御給仕をうけり
人はくく渠が信心の厚きよ才の英れ九ならざることをうけ終ひ
或附是信よ宣ふやうま奥州の地よるやえ末大國うく東山の隈よ
夷よ接し誠よ我日本の東垣より其人物賢朴うて禮讓よく専ら
自己の力をたのめて悍猜の影いをもむる稟をのぼり編なり此を
て昔の王化ともむの終り中よこれ降祀せり其遠鄙の村里よ門て
佛名とも知るものなく五戒を犯し五逆と終ひ自業自得の罪よ沈む
も終りこれとささるやうくはと何れ廣大無邊の佛願よも洩ぬる
我々が善をうするよ即其人之急ぎ彼地よ三城真宗念佛の功德を弘
通せば我本懐を満るよ是よりとむるよ是信房の今さら別

ちり聞法の遠さうる弘法く致きとまぐ園縁せらるるといふも聖人強
 て命ど終るは今の師命のまがうく竟も別を告て奥州よこと後と
 たりかくて園園斯波郡石が森との地弘法の梵字を用き本誓寺と
 号し専ら教をさうらぐ易妙直入の法門のんが忽ら遠近の道俗日
 疾に群集し是信大徳の化益と世多る者其教をまゝにのりたるやとみ
 一時に方々芳名高く極に隆じて他邦に屈法せらるる教化のまはれた中
 に信州にはさうまれ真宗有縁の者多るれば即彼地を抄ひて一寺と
 祀立し弘法阿闍梨とてもとより松代本誓寺を重んずる人御真宗を
 本誓寺の額にこの松代は信ませり 然も文永三丙 十月
 上旬の日より是信房御遠例よませりが月中旬并に月既水面西右脇
 あり念佛の誓りありと大徳生をそ遂法ひき門を多打たしん徳
 慕河原の余り茶毘の後送骨を拾ひてみ本松との地は是を納
 とらん嗣子相續して并十二世賢勝房寺誓の耐はつとて天正十八年

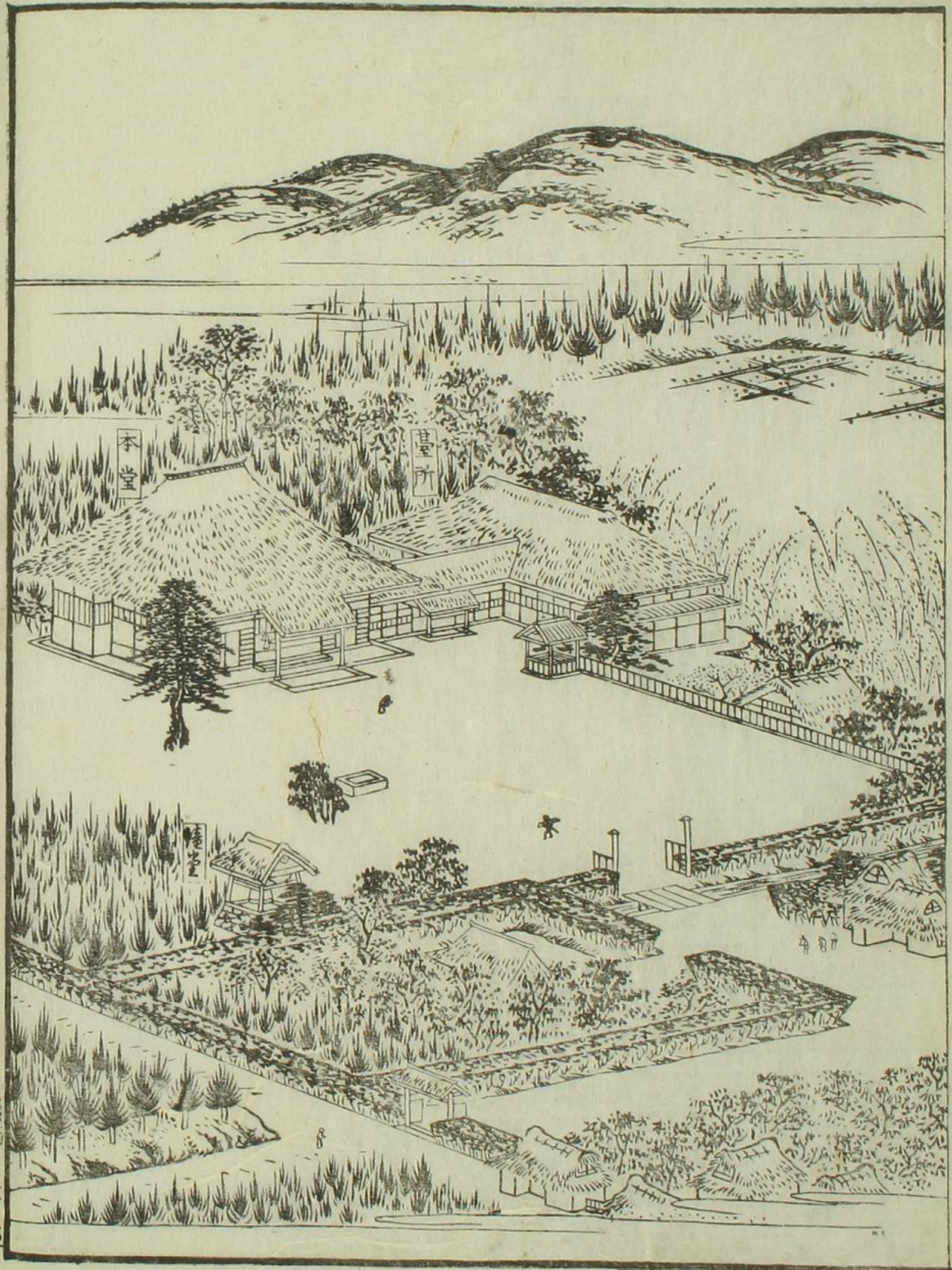
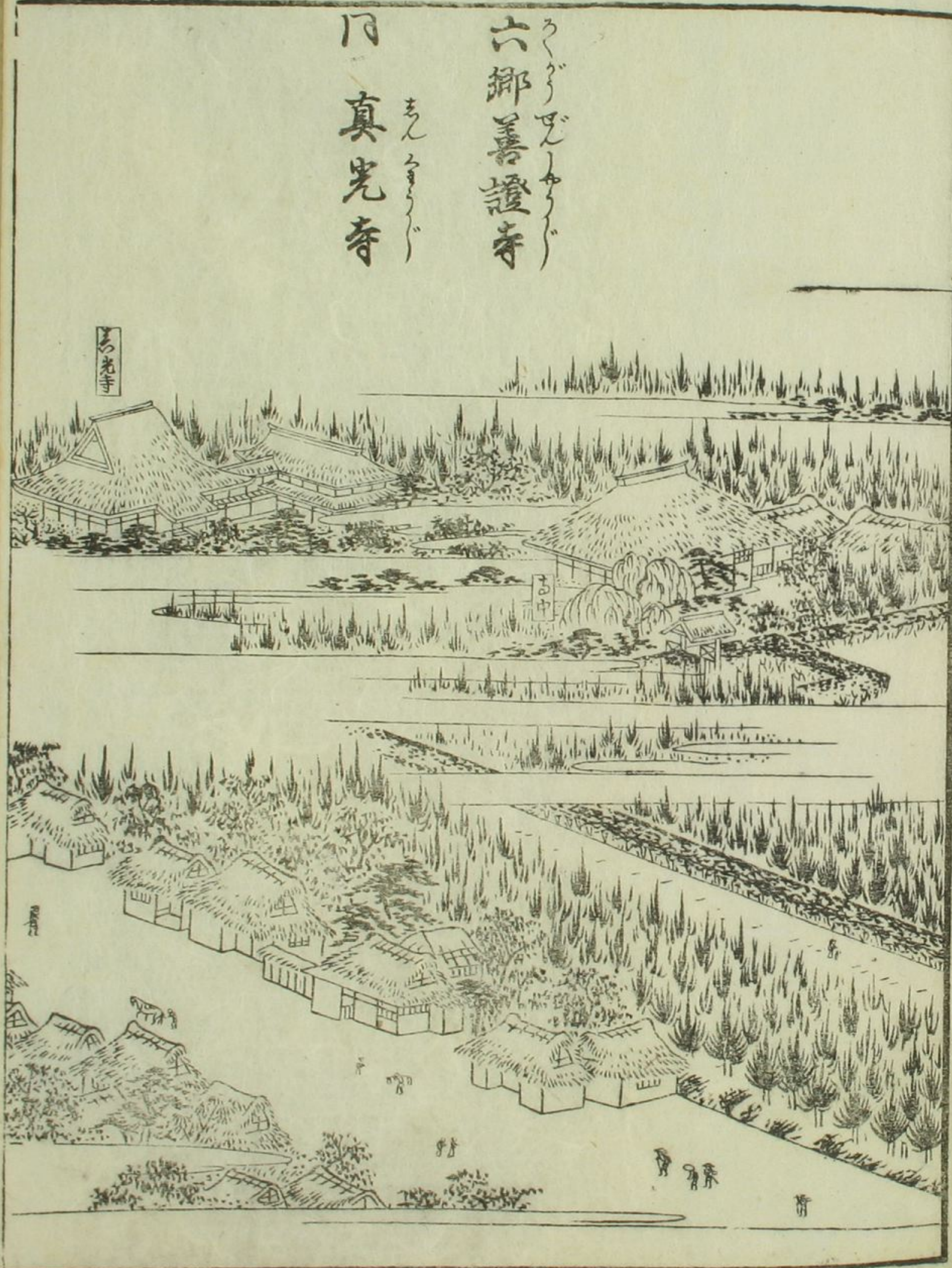
冠蓮の尊像

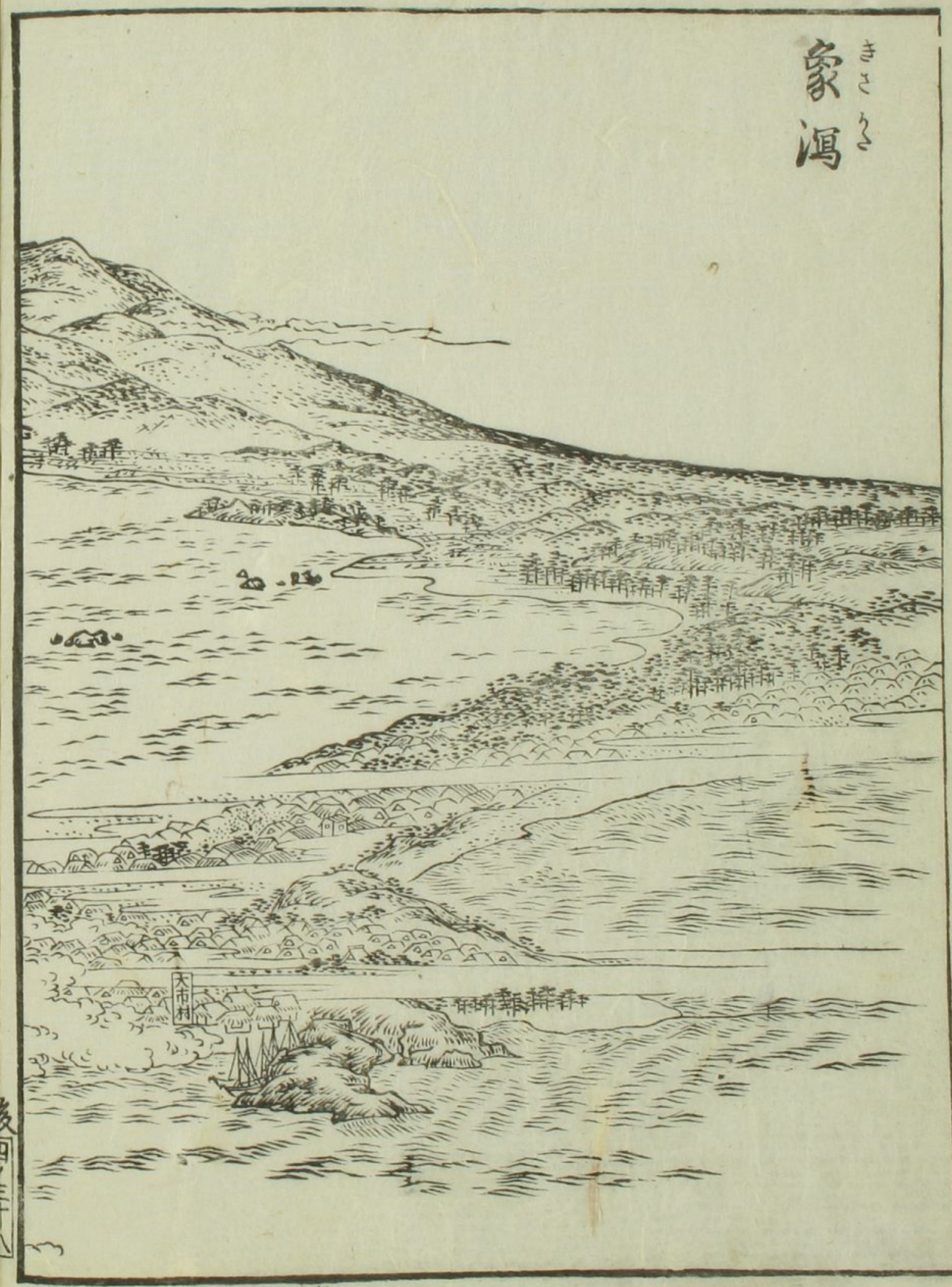
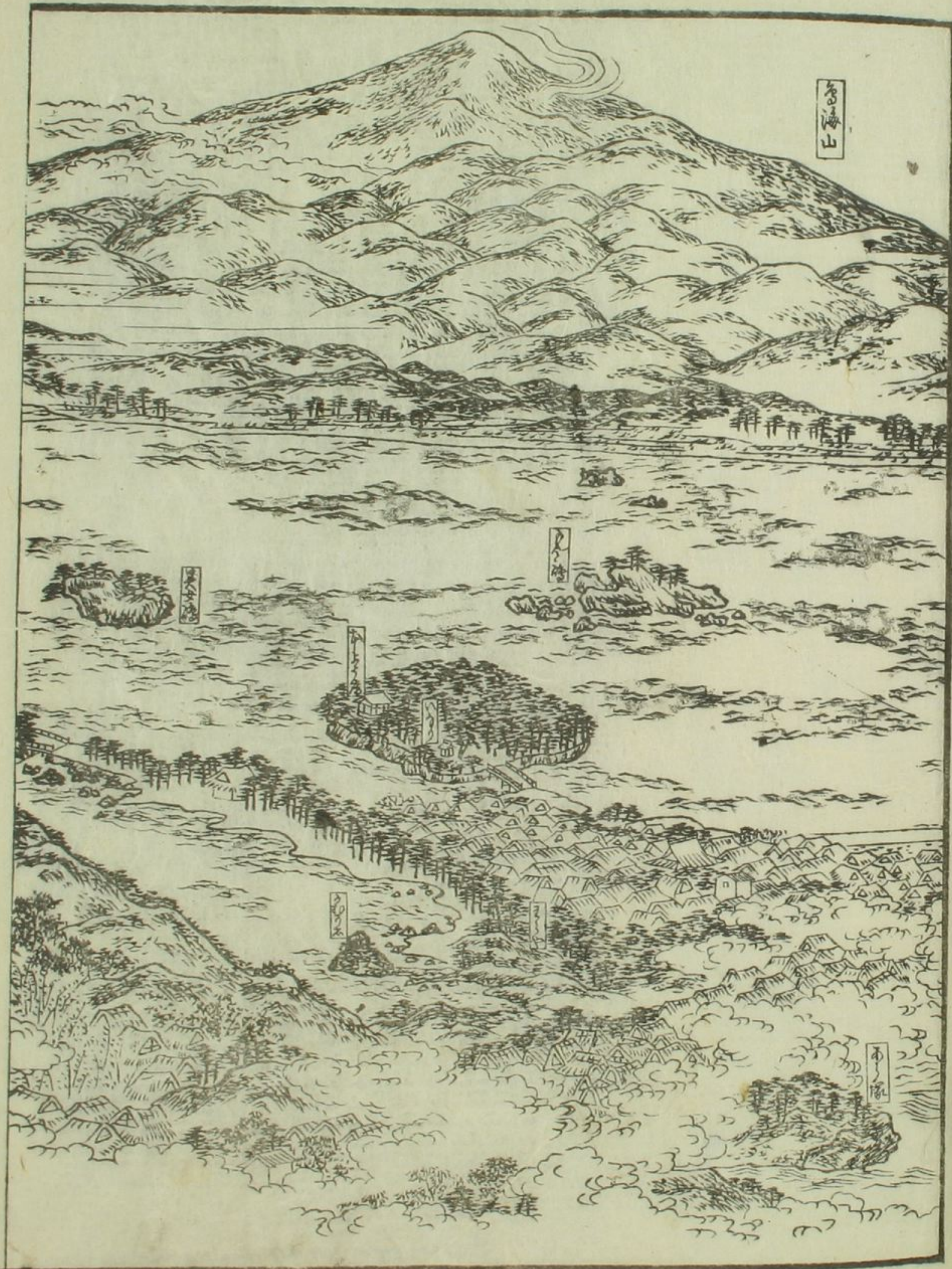


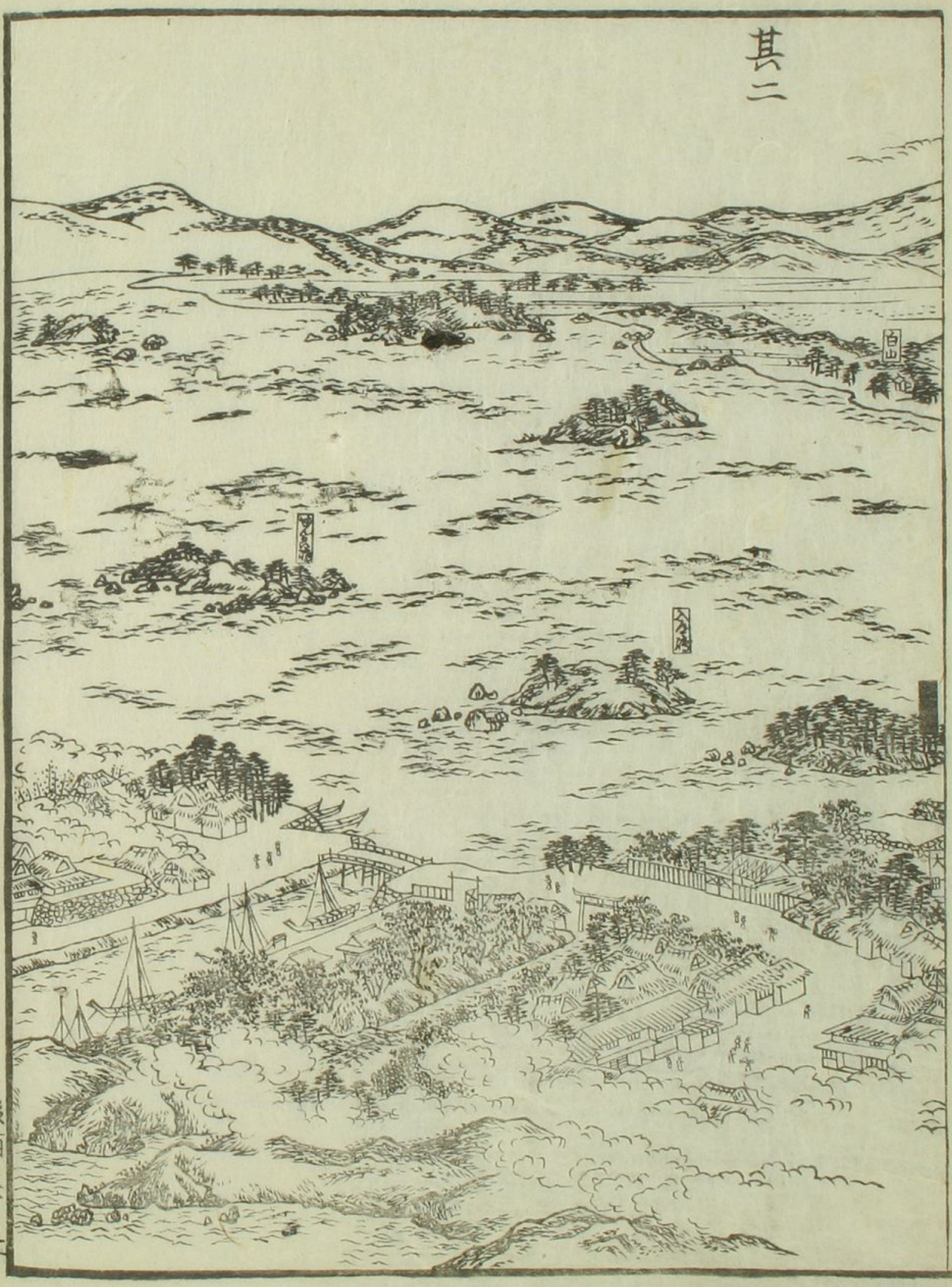
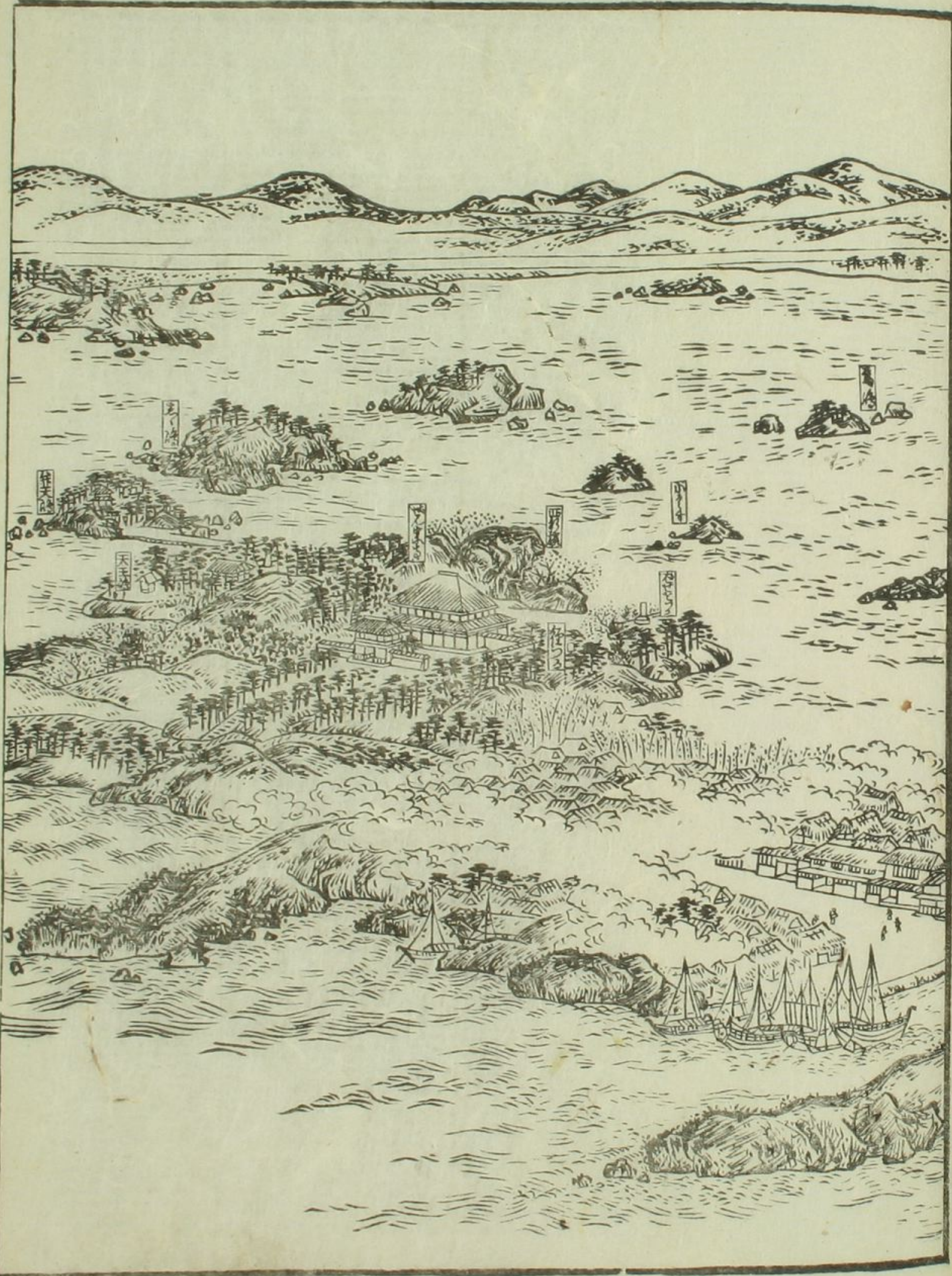


り
を
う
か
い
の
づ
盛
岡
樺
火
之
國

ろくごうざんか
六郷善證寺
真光寺









不恩謙の沖山方

凍風やわの三日月のねぐ山

雲の峯いくのちまきく月乃山

活きぬ湯殿うねらに後々

○夫吹明村上郡葡萄村の山中より八幡を即義家造營の地なりとて
此ら中より葡萄まきして夏の以い置よりら出ると高入村とてこころを
もろりともくけ造諸本まきく至夜を暖のまららく圍塚をりやく燈火
を引あつの雷てま

○産國の名産・夏上紅花・月せんまい
海内の美味にして
其又夏上の名産なり
茶良布
用多た
瀬石

瀧・漆・油紙・秋田紫根・月露
世に名なる大産物なるも大に余りぬなり一又
又す及ぶ小切て平四を獲つる果はいろ

くして金よ
久ても指つる
白毛織
かほ形之石洞毛とヤ
覆警とつる
蕨織
そらひとつじき
狸織
そらひの毛と

于蕨・真旗・霞羹餅・麻皮
す
蕨
麻皮
す
蕨
麻皮
す
蕨
麻皮

○那須野 産國奥州より取らるる産物
なと此地の系物とんむしとてしつとてしつ将場とてしつとてしつ

下野國

凡そこの上野國とあるは



孫彩面吉郎義後の息なり其以上の下を虐げ下りてを凌ぐの凡俗
久くくうびて世に弘きと如んを察し隱遁のちひ頻りて即常
州那珂郡高倉村に避居し後安八郎信親と号せしが終に承久元年
の秋卯年二十九歳にして高祖聖人の御後身と知り信願房と名づく
始に師命より河内國にあり一字を管業として真宗と弘通即河内
に郡八尾後又常國上那須郡栗井麻崎に堂宇を建立し專ら常國に
弘法せり先即當寺の根元より聖人既し御降洛の日よりありて信願則
これを供奉し相州河津淹留内日と附近給仕せらるるが相州の道俗
聖人の御徳を志しなり御興と云ぎり御發駕殆ど延引及びびと
さまくは論し御上洛の後信願房に命せらるる相州を教導の
しゆ給ふ此は抄ひく信願鎌倉に一字を造置し福前山津妙寺と号し
勅化弘法とらるる意懐なりなり
津妙寺後上州赤松に後
時今の中の津妙寺是也 信願房かたのどく

不くは基趾を用き専ら常流に功勞をかき終に法臘七十八歳ありて承
久元年戊辰三月十八日大往生とぞ遂らるる其後教代を経て延宝八
年酉年石塚ありて當院を今の鳥山よりつとんとり

○中川の鳥山の麓下より赤い水源のこがりより流し出流合しそ
常州水戸の海へ出其急流の大川なり鳥山より眺望すれば十八の瀬流あり
みまうれおて奇観なり吾人の不謂大なるなり此觀ありと云りありのりこり

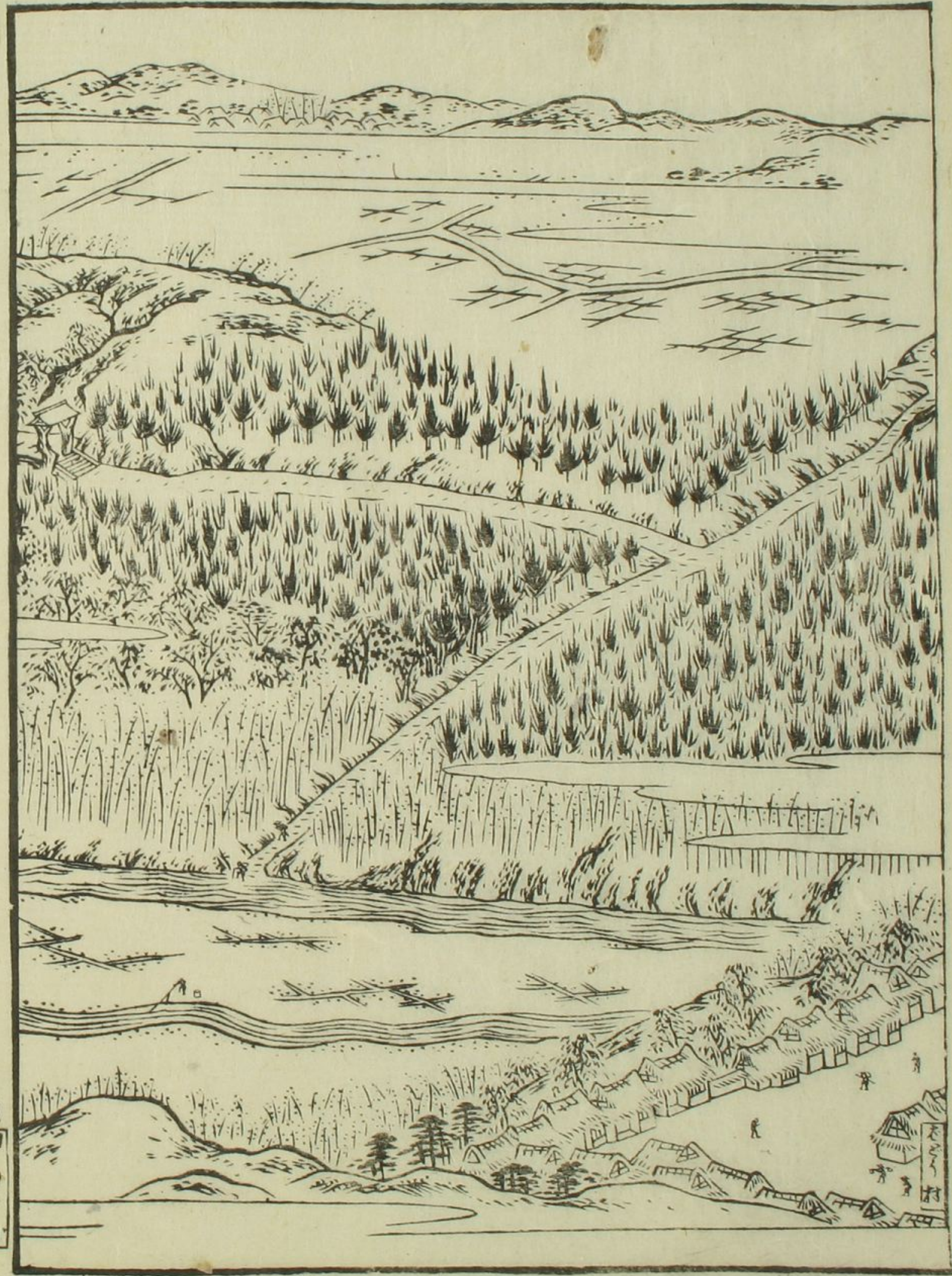
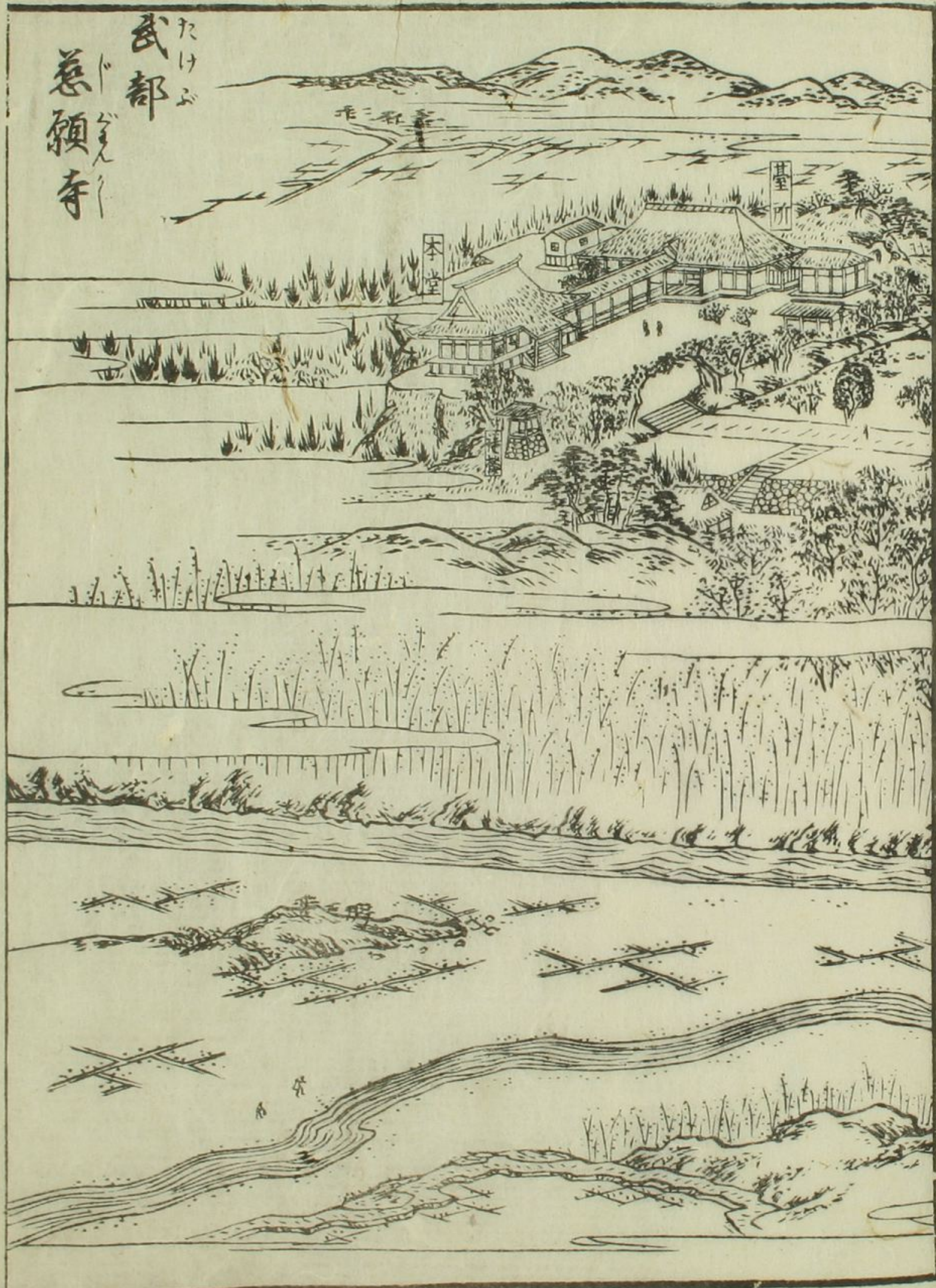
栗野山慈願寺 西流 日郡馬改武郡あり

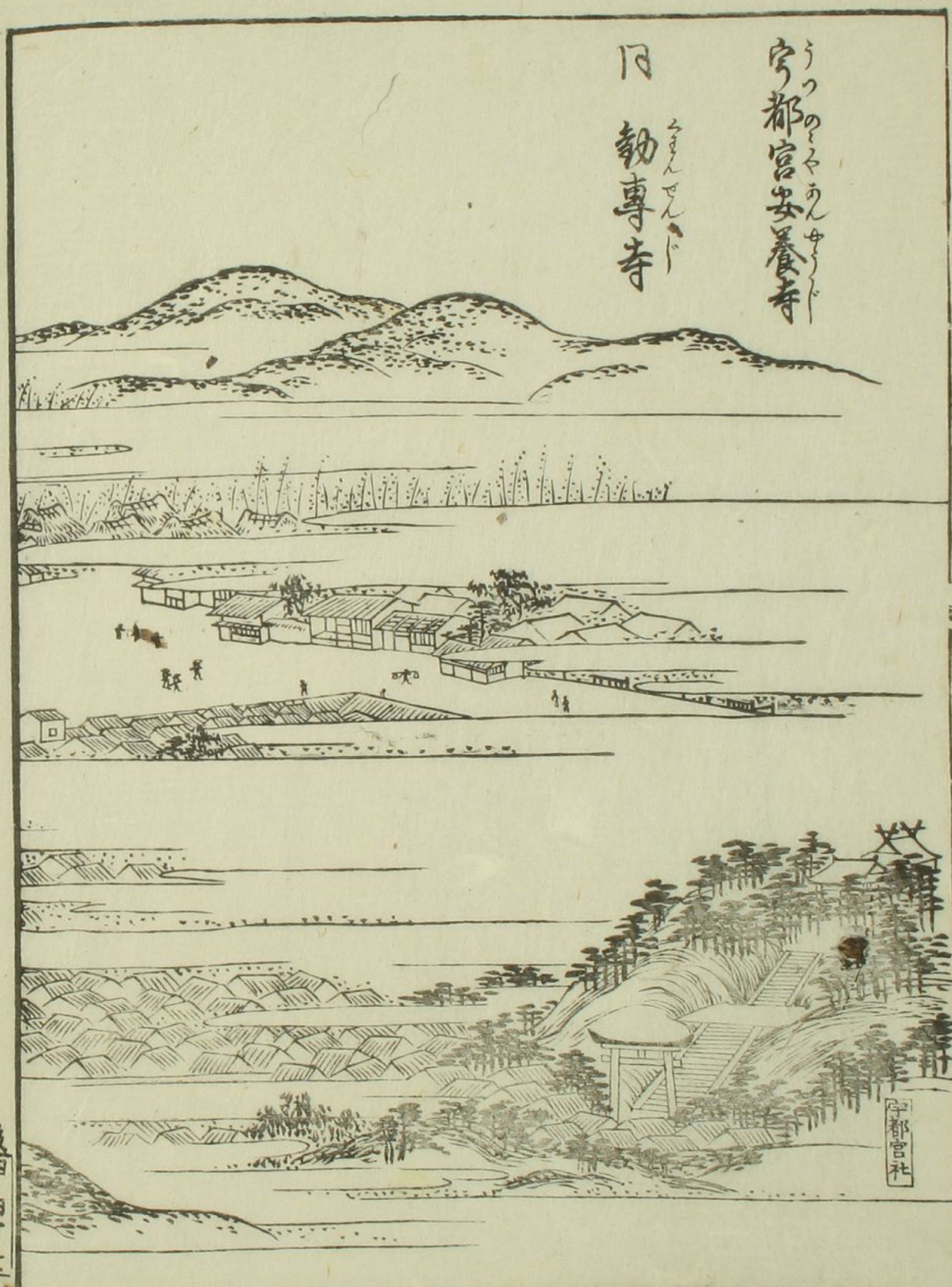
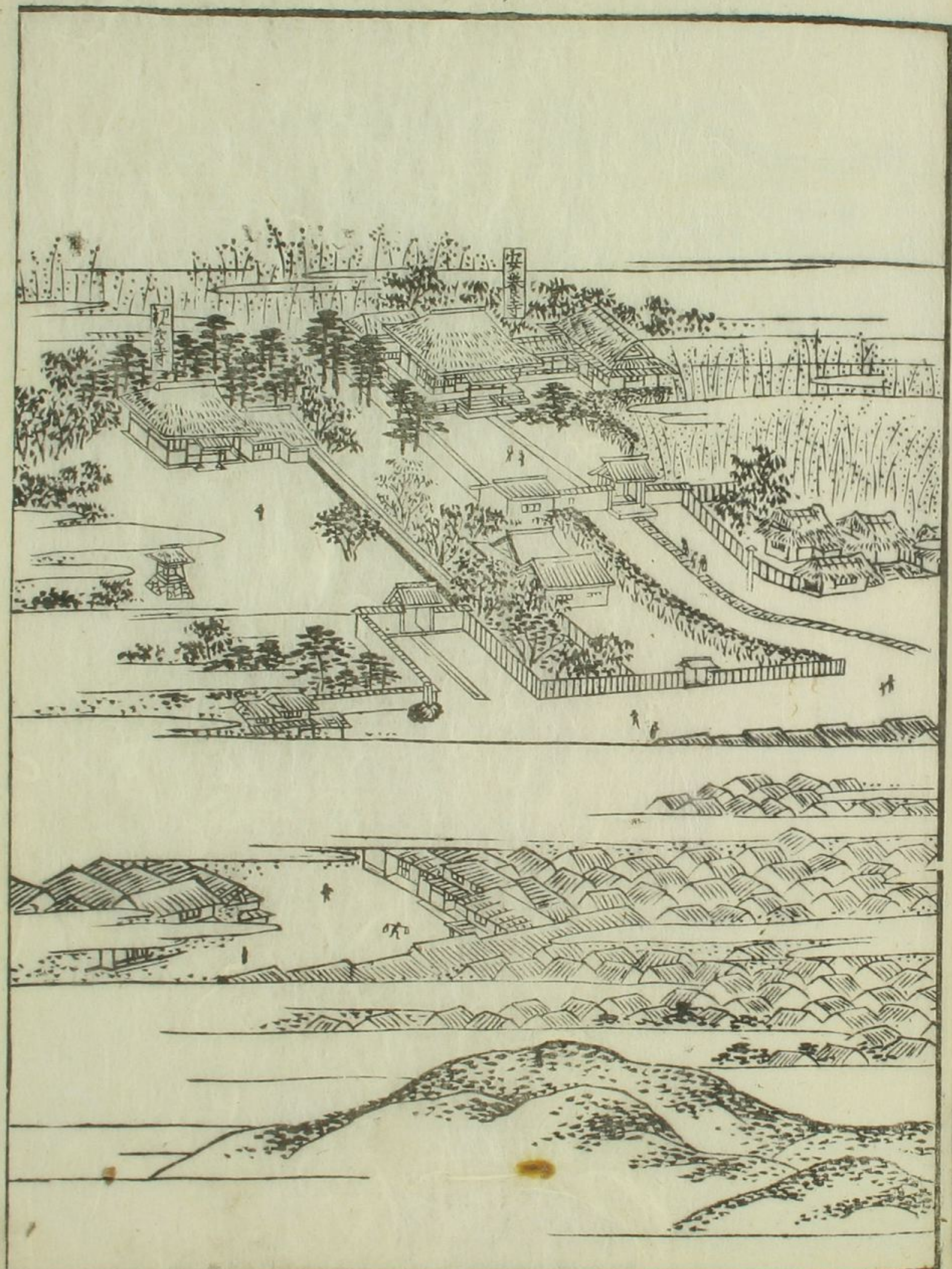
當寺も右信願房の用基にして鳥山武郡西慈願寺何より根元校
流つるのを志し流 或は云は信願房教志大徳當て栗井麻崎に一字と造置し慈願寺と
號し後石塚ありて天正年中當地より寺と云りつとんとり云り此觀ありと云りありのりこり

高栄山法得寺 西流 日國都賀郡小山莊佐河村あり

當院の四天王宗ありて醫王寺と号せり彼昔聖人の工足性信
大徳諸國化導の初より仁治三年弥生なりはれ實當に妙なり

武部
たけぶ
總領寺
すべり



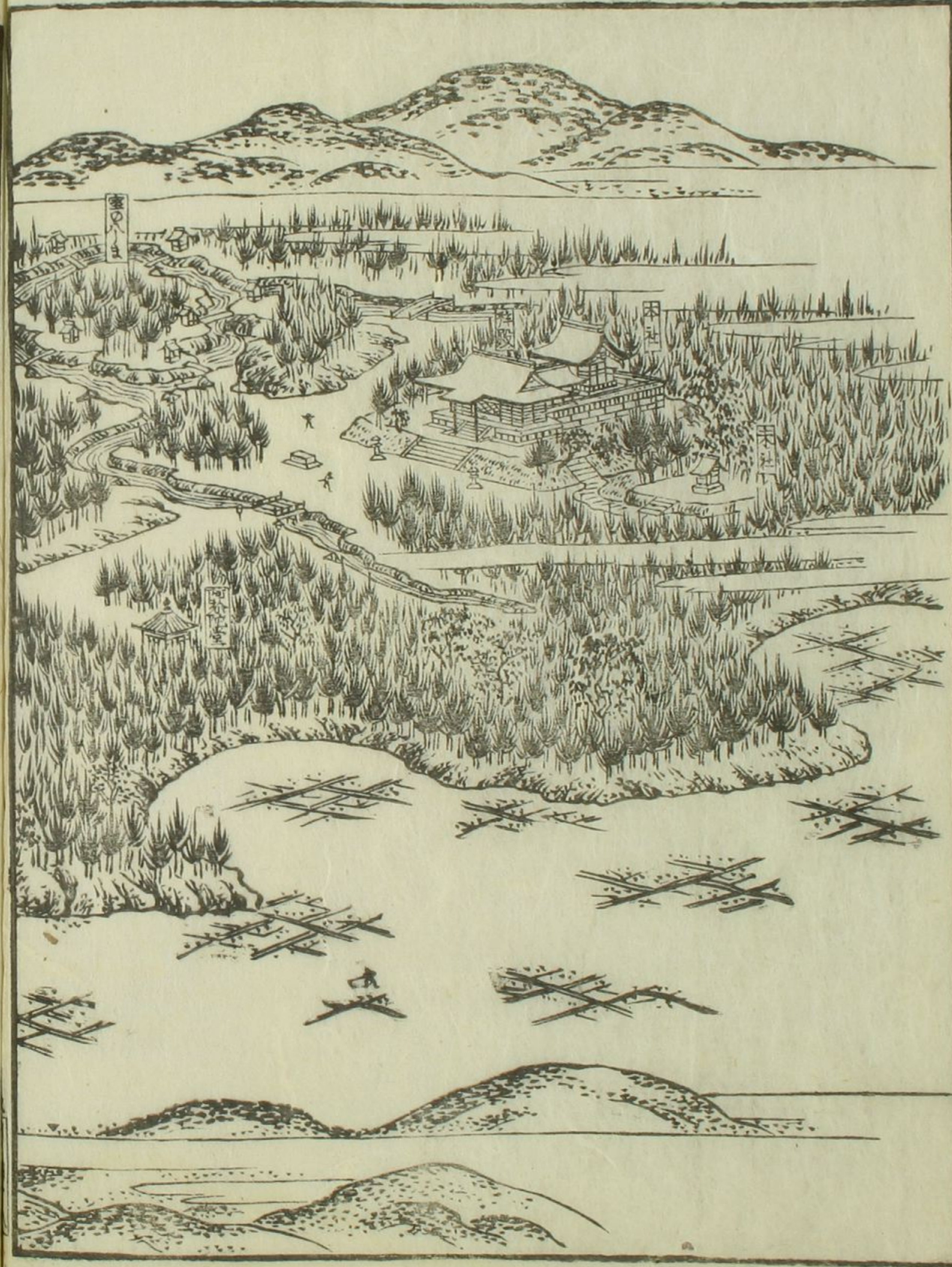
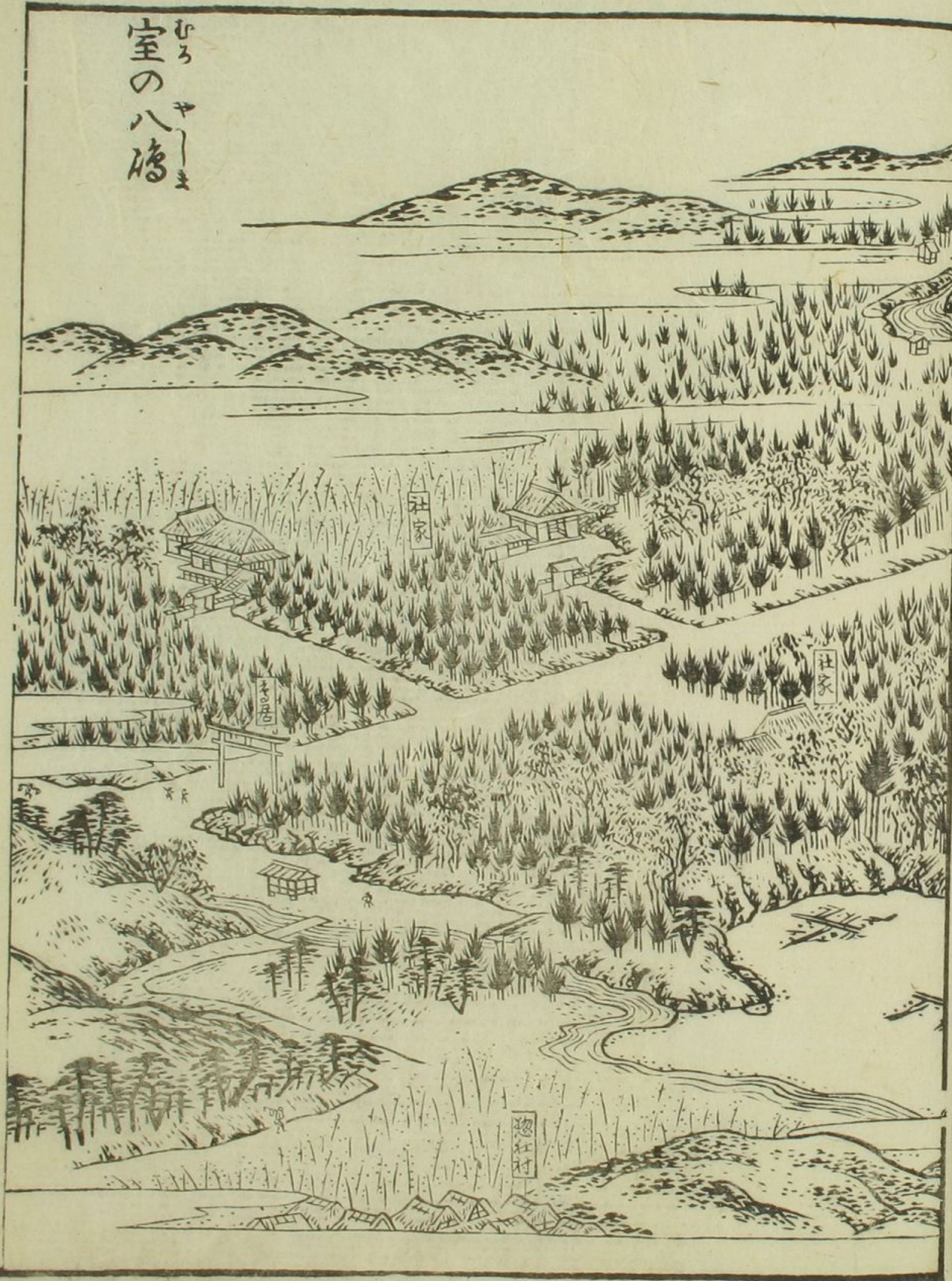


うつのみやあんやうじ
 宇都宮安養寺
 日勅専寺

宇都宮社

後四十七

ひろ
室の
八
碓



高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

富士河内権現の御親神の御寄拜の事

富士河内権現の御親神の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

○室の八幡の御寄拜の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

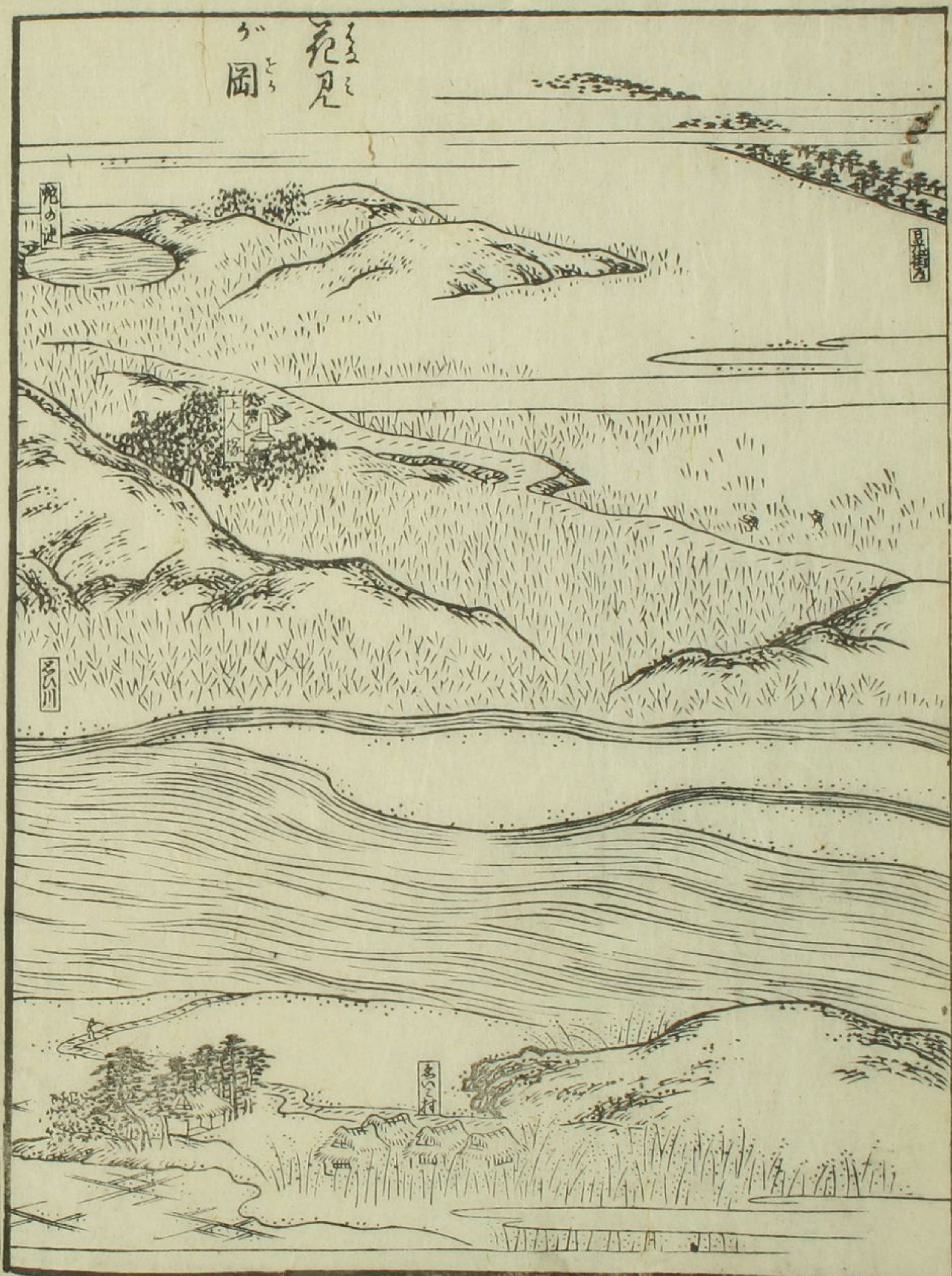
高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

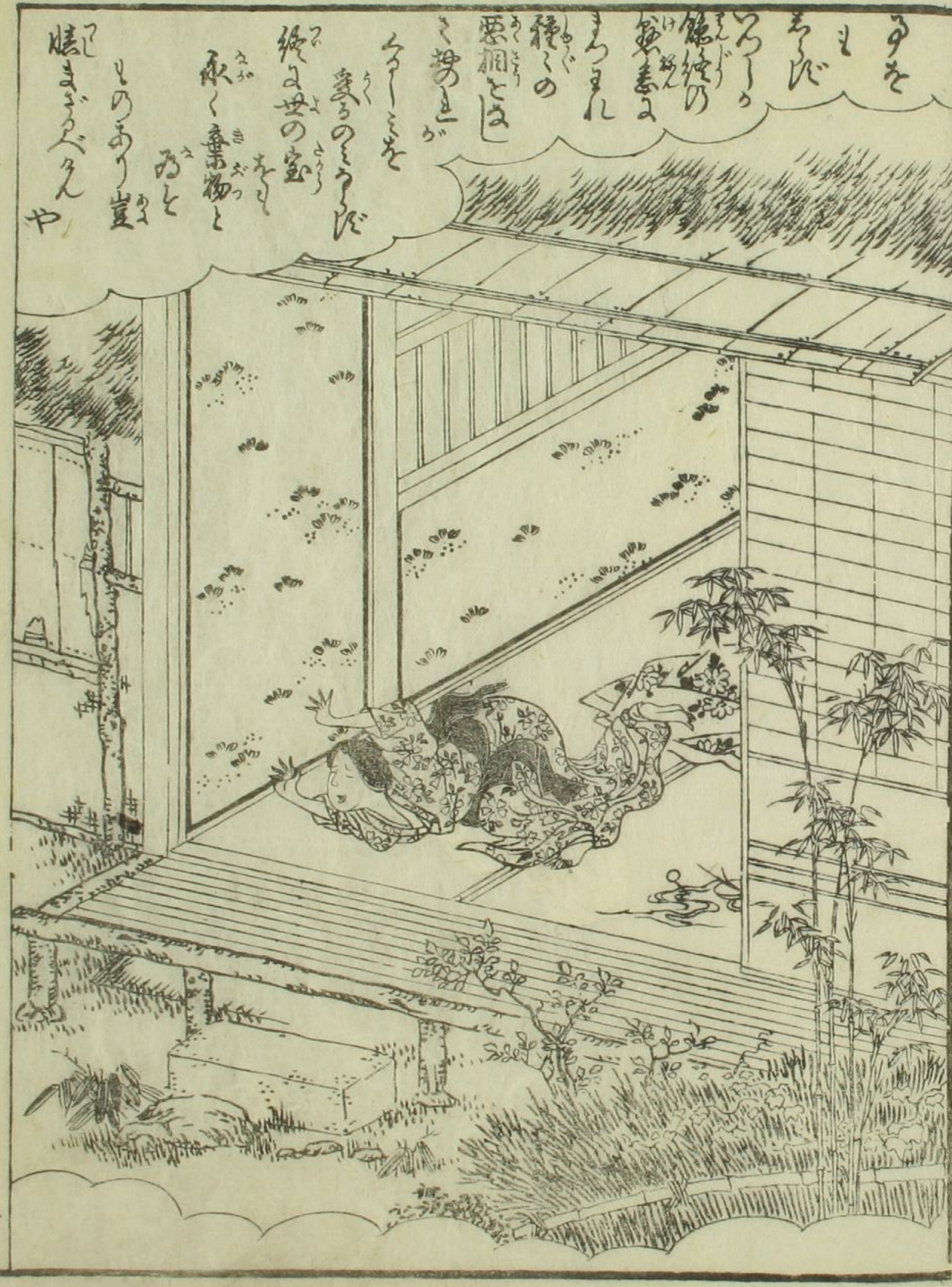
高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事

高祖聖人出國御旅の御寄拜の事





身を
 さらし
 たるは
 徳性の
 衰えよ
 まつれ
 種々の
 悪相とは
 女身が
 くらゐを
 衰ふの
 後世の
 承く棄物
 のあり
 暁まら
 や



妬婦生るが
 毒蛇と如く
 其支及び
 妾を蝕蝨
 殺す
 あいや
 世に材と
 男女の中
 のしよ
 世に材と
 苦肉
 てあ
 施と

一 結ぶとやあり其徳を以て彼邪神を降伏し諸人の災害を
除き結ぶと瀧又廣き其恩徳あらんと傳へ給ひ奉りて聖人心を
安んじ給へ申す今我々願念佛を弘通するの秋なり是れ又衆生結縁
の一助と即尔掌はしくつ掃部が案内を以て彼開き給ひはく
と順覽はし給ひ我れ降魔の法を修せ給ひ元來邪神を伏し
のいとほしと人々も多幸弘むる弥陀の本教也念佛不可思議の
妙徳を以て徐に渠を教化せしむるならんや其甲斐有らん
且ま毒蛇惡龍より一且神と崇め人の罪なき人と後々害するの
いとほしはしといふさま奇怪ありとまかりとて即淵を掘りて板の窟
を穿らせ自ら坐せ給ひ三部の妙典を翻し不可思議の
妙号を唱へつ其いとまきは水中にひいて恰も人の對するごとく宮
中へ汝此水中の怪とこれ何等の神なりと里民と悩むるの跡きや

且し魑魅魍魎のたぐひありて我が先寃魂迷害の毒龍惡蛇の
不おちる能くやう其形を以て我々まゝて改懺悔を以て我々
汝が亦授若く樂の佛果を得給へんはとて尚も貪穢暴
惡を恣にし人民を害するものならん邪なりと邪なりと神明
佛陀のありとてより億方劫を経るともいつう惡報を脱すべきと交
又佛法廣き利益を説きまゝ小御教化せしむ 是てかくれどく
して三月三日を以て給ひ給ふ身は日の曉乘り水面波を以て送す
あけうちより忽ちとして一人の女ありて來り聖人を礼辭して
多々申す妻の旧此里に若くは得娘姑の如く汝く候へと懸念邪
見ありといふ聖人の常なりしはまかり若くこれを厭ひ元來家富
何れううぬぬるれが竊に妻をぞ申すいぬ此妻容貌うはしき
ら心さまよはしかりたるはまの爲も大方なり日くは通し給へ

さるじぶ胸の穴けきゆひまうた我なるふくろむつとと見しは
しうろくかこてるかむしれぬ悩むまもを忘るるゆゑくをのぼとま
又何して物方じきさまるるんまのいよく踏もて妻をんら
仇敵のどくをればはこれとくもかの女ゆなれが私を渠を毒殺
せんと謀も何とき女の智慧まのやもこれをさそり妻ときじく
いまめつて鬼と腕よとのまうてたまぐお擲せらばはしと我は
よれ毒うれも此お擲まららひく再びままも人も面ぶせくさ
とともせ質の志つとまざればとやせんかくやと心ひつりよせまりきて
忽ち我れ今人目も怒ともあはれ唯一念の怒を殺て鬼ともあ
腕ももれいふはして彼女をさうらじ胸の焦熱をやとんんと直側
室よまわつて彼女を見るより鬼一口ぬ喰んとせよとまのあえま
何いせこれをおへとめんといふ人のつとまも何せぞおのいあうせま

らせんと其すくまの咽は喰付てあぐる女を打たをしあひのまゆ
らひ裂しは日ごまうよまも女も死したるありとま少し心も幼
むわううはしうろくが俄又熱ありゆがごとく大焦熱の若と通將煩
悶して階し人をも忘せしと送しがありし姿もあうて忽ち腕形の
よそわひもあう我身なぐりも押も逃しくをらばはしくこま
なる九易多危の淵よとび入再び人よまもとらうひくも腕
身の業火三徳れを日夜よとく心狂じて人をえららふ
解血咽をうらかせばうきや將附の若悩をまぬぐるに似
むつともむらひもまもとてまもせ教多の人民を悩はしつと
罪をかきつうかい漸るるき我身なるふは日尊き聖人の漢經
祿名微妙の神聖水面よいき清涼にして我も我身の焦熱と
はし若悩をそと身心全く安きごとしまうのなるは聞法に利



毒蛇聖人の化益に
よんく
悪報を
解脱
して
向日
と
天
る
図

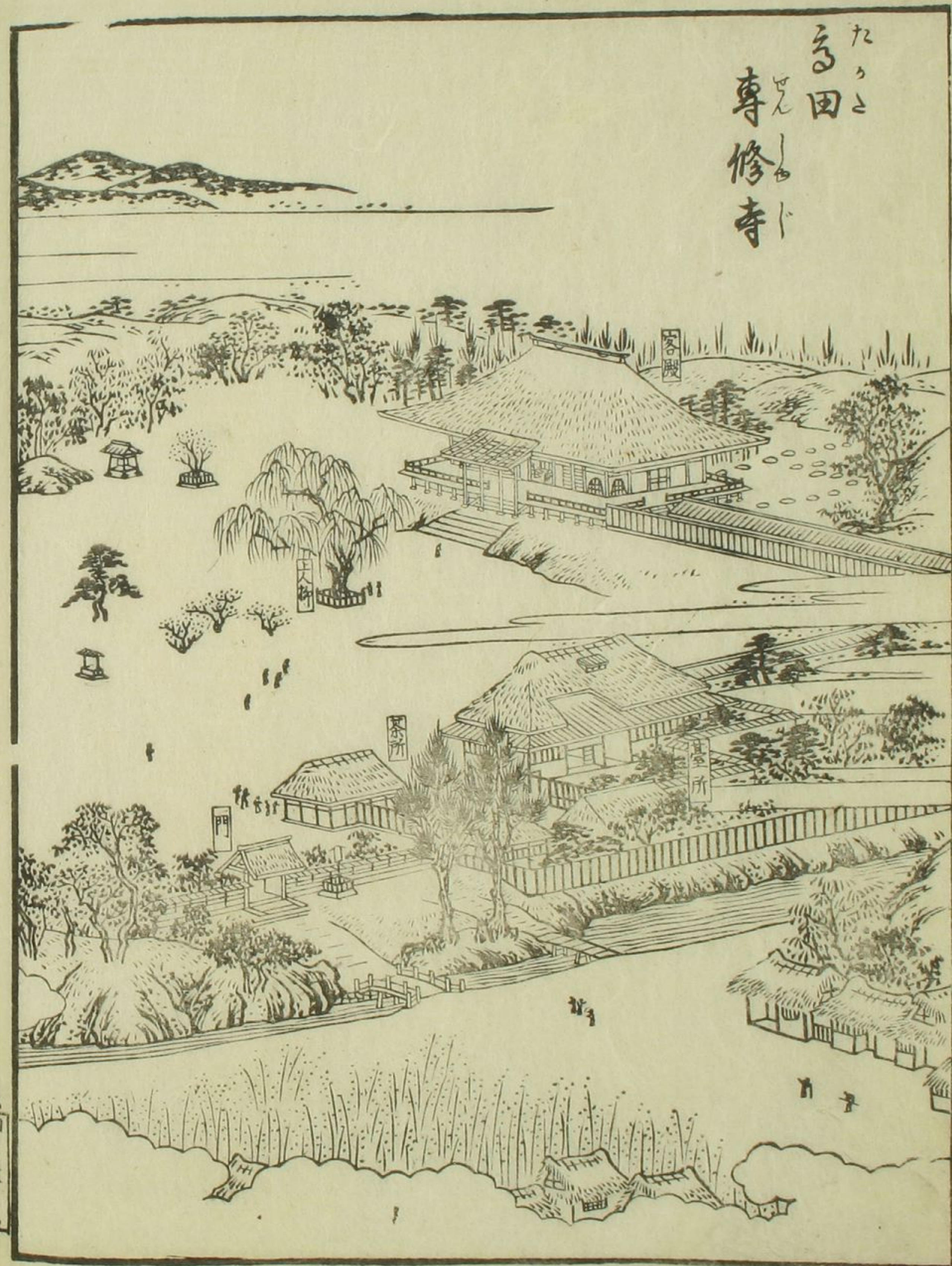
まう其の神宮なりとてども密に聖人を頂礼し弥陀の本願を降
命して又二心ありたり即ち其の神に群集此人のついでに遠近
の若し安んずる聖人の徳を以てとてせ給ふをまこといなり神教化とせり
化力此宗門を為す事とる者奉て篤く信じて其れが東方遠鄙の國を
まはれこれに邪見を法の族まうりしと今まの何れも體身天との果を受
再び世の傳へりて邪神の災害絶たまぬ道に信じて念佛を依
しさら後世の一ちを心づけたるを殊勝なり是の丸山其附諸人
群集して天を拜見するありて是れが圖と名づく又淵と親密池
と云ふを共に日記に見へり
佛のまはれ 即ち都宮安養寺の坊主に
て碑銘あり

高田専修寺

日圓芳安郡大内の庄あり

当院阿彌陀寺 宗祖鸞聖人開基神建立の靈場之惣州一身回

神門跡の神田院あり今神兼常所と云ふなり○本堂十二間に面
岡山聖人神肖像を安置し○金堂阿彌陀 本尊若光寺日一
禱の如來當山の開闢其由來を尋く有り當初元仁二年正
月八日高祖鸞聖人附神年 當國大内の莊柳邊と云ふ所に於
て生れし一紅日既西かたふき蒼靄孤村をうこめてるなり也
何處も宿と求むべき方なきらんば蕭然と彷徨するかえり大
なる石板舟石と云ふ東西五七寸 のありしが旅のならむとて即石の上を履
て去り静に念佛して押しまゝる小疾もやいとく交り長庚
明星も又東よのかりんとする時妙一人の天童忽現して出来ま
り聖人これを見給ふと一尺ありし柳の枝は白紗の色と濡くま
推へ東西を盤桓してうらめていまく白蟻の池のときりふは一夜の柳
枝をば板舟の磐の南には佛生國の種生ぬと朗詠するなり數回

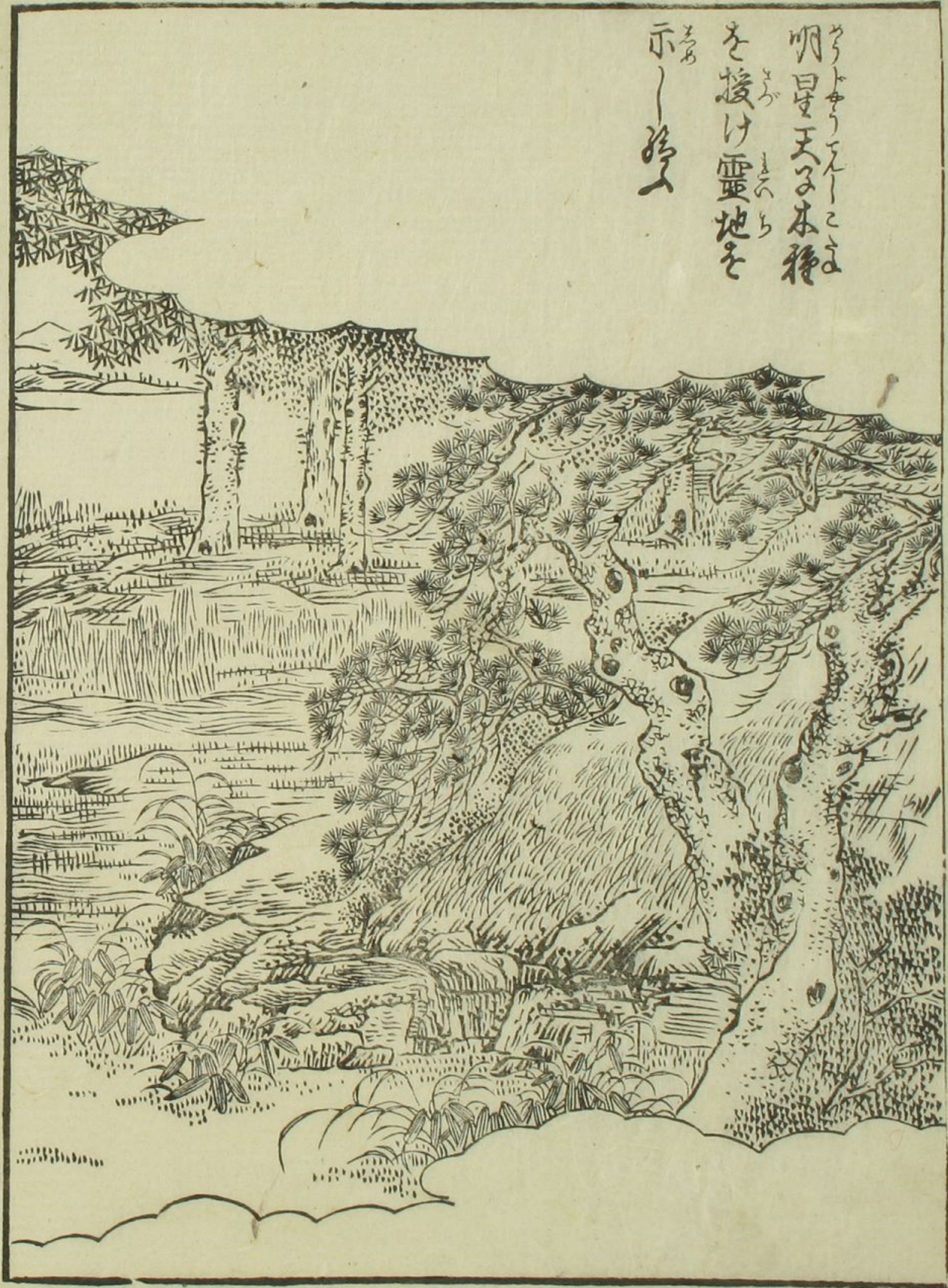


た
の
田
専
修
寺

徳
四
五
年
成



多^たう^うえ^えこ^こま
明^あ星^{せい}天^{てん}子^し本^{ほん}種^{しゅ}
を^を接^せけ^け靈^{りやう}地^ちを^を
示^しし^し後^ご



あつて水は向入て去んて以て聖人急ぎこれをとらむ重なるいり何國の人
そと同せ給ひしう即著てまうさく我のこれ明星天子本地虚を
我菩薩なり師又伽藍の靈地を示さんあそこを来りりまらぬ
なりとく南方水田と指しこれ此柳の地の往昔釈迦牟尼世に
説法あり靈場とて則如意輪觀世音菩薩佛勅と受く方便利生を
結終ふの梵區なり聖人よく此地又伽藍と建位し此二樹を植終ふに
これその天竺白鷺池の柳又け色くは正登山北菩薩子とてかの二
種を聖人又授ふるたれに聖人かきめてのこまり此地を圍ふ不熱淨
田にして水溢るうんがして伽藍の地と成し作らんやと同せたるは
臺又懸流として夏は水の中に入ると冬は氷が結ぶ其の方を去るに
聖人よく奇特の名いとほし給ひと給ふと彼柳條を水田に挿し菩薩
子と摩石の南方又種を給ひたらば石よりのがけて念佛して好むま

くろく又疾もあつくと明王うたりたる不思議や若に種給ひたる石
の二種の靈本忽ち根牙を生しとるが中又二丈又餘なる大樹も枝葉
上下葦り緑陰に方又布り板又彼水田の今まで溢し瀦水何れに
流と去り中央凸流として小るき丘と成りこれよんて此地を遠近の
道俗これを見給し一日驚嘆して聖人を信せ給ふなりはかくて
此の隣國までいかに人々渴仰のけしきをうけおろさるる
下野の國司志國の城を大内國勢と給めし久下田を即秀國小栗
の城を尚家真壁の郡司春國相馬の城を高貞平塚の莊司重連を
岡の城を基貞とんと附る名を得て侯家の面を我若らじと聖人は降
伏しなり其も重礼教とるの恰も如來世をたてく各自砂石と運び
竹本と引て棟宇造立の草創をうらむは種も老若貴族の分らなく
集り来り人まの雲たてくつらり向よりは本石の山とほらぬ志のこころ

以常經二冊の諸弟子奥羽西國の門徒の輩雲と凌ぎ勢と分りて
群集既二日ありて程舎造立りんとん然又聖人宮村の草菴に
はしくて不思議の靈者と得たり以て其年の四月十日の夜に
刻むり又一人の聖僧來てのたまき師の親重今既又漢之て
此より速に信濃國若光寺に來り終り我身を分ちて師に授くは
伽藍落成の日又きてこれを安座「末世の衆生を引導」終るに
と若母より西に向ふて立り終り一ヶ高田の地にて消うせたまは
見く及さぬ聖人歎喜斜るに即而身又性信順信乃又大徳と
陸へ急ぎ若光寺に宿て終り又十九日の明に若光寺の傍後小
本堂に舍合して相とて治て曰此疾奇特の御者と夢より御本
る阿弥陀如来梵音を奉て曰く明に我法若信法師を命ちた
し乃登山とて兼て我軀をまうらひするの約ありは汝等謹て是

を授くはしくたまはしく授へせ終り」と異にけりとの及物よりこの
そも不思議の靈者と稱しを拜しなるふ日一醉の三をお垂ん
て立せ終り一列十有八人の傍衆多佛勅の何とかなる感涙騰り
終り今又始りぬ本尊の靈跡各漢秋はるわくも聖人の夜に日又
終り急ぎせ終り終り此附既而御意ならせ終りは衆僧於て迎へ奉
り佛勅の執きはるる物より檀よまはしまし一光三尊の貴令佛
を奉り來り聖人の執りなれが聖人歎喜の涙をり即袈裟覆よつと
とり終りよりしましせく自これを買せ終り暇と告て立出終り順信
性信の妻法師より一助負ましせ月廿六日宮村よこそ中向はしく
たり
若光寺南門外院院中庭房修起り此のつづきは三尊一光の靈跡三圓五取の
靈跡圖は檀令の聖容よりせ終りの如きなり其靈跡のつづきは三尊一光の靈跡の
一の佛像より終り出院院中庭房修起り此のつづきは三尊一光の靈跡三圓五取の
靈跡圖は檀令の聖容よりせ終りの如きなり其靈跡のつづきは三尊一光の靈跡の
志願悉皆満ち何れせ終り日廿八日より御堂造立の祈禱を

名号ひ終ふは化力の門後多結まうけたるのみははひて期
したる飛弾信濃の番匠多々命ぐ日以の精力十倍して
さむり結構したる大御堂に本年に月上旬まで令堂叙
堂をせしめに門築地のうりまで悉く成就せしむ彼柳及び
善提樹を汀の左右に植とせ二樹一今伽藍成然の御依養ありてめでたく
後移らせ終ふ燃又權化不可思議の靈場なり其後聖人
御年六十歳貞永元年正月十日当院の御任職を真佛
上人上人の信徳法説又譲り終ふ真佛安又抄ひく第二代の法
脈相承阿門て終ふ正嘉二年三月八日法騰又十歳少く当
院又抄ひく寂し終ふ此附上人御これよりして同年十二月真佛
の法友聖人の御直弟教智上人附法相承して第二代の
任持職と授り終ふ其後七世と経て第十代真惠上人の御

附勢州一丸田へうつり終ひ高田の右院に今又相傳と善提

終ふと云 ○御靈宝聖人の御真像 皇古よりる像 真佛上

人像 以上三様とも聖人の御自他なりこれい真佛上人の肖像真佛滅後高田の

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

御智上人の御像也 御智上人の御像 御智上人の御像也

殿とぞやたり此府城東の郡司殿司我しくと聖人と改修
新法衣の承りたるまうりしは國師の舎才真徳國春是
れ日く道入んと海心そあらはしと舎兄の國司謙らけ
齒鐵の承りたるまうりしは國師の舎才真徳國春是
餘三郎春時をて聖人常陸の所才とぞぬくまうりしは國師
上人の所才とぞぬくまうりしは國師の舎才真徳國春是
上人の所才とぞぬくまうりしは國師の舎才真徳國春是
記は上人の信地り平氏より桓武天皇の後流平經盛より
臺石保重とらふ初雅の所より法統上人の所才とぞぬく
佛真と号し博識多才の大徳なりしが空師没し後ひのり
る祖と法統と名し真佛と改修保年中結城稱名寺と開
基し正嘉二年三月八日に十三歳より一歳を以て真佛生誕開
闢と名すの靈區とらふ三ヶ所稱名寺創建の後一男信澄と附居
又下野國を回專修寺と記すし取智と一女と配嫁して是と傳り
又澁州淡谷真正寺と造るはと記すとも真佛の信地り保中
不滿書ふ取智より又佛光寺と記すとも真佛の信地り保中
ありは高祖聖人所造建の靈場とらふまうりしは國師の舎才
何よりとらふく信地り保中と記すとも真佛の信地り保中

宮村御旧跡

御の二より平家滅亡の後の世の安へと傳りて大内家と後醍醐
一は家ありしとや是又其理ありしと傳りて大内家の流る
一は又信用しとらふ○真佛一男一女のり享保の祀既よりの
正し此より遠藤源一は稱名寺の相承り真佛の後才西宮信地
房より附居せりといふとらふまうりしは國師の舎才真徳國春是
又傳りしは國師の舎才真徳國春是と記すとも真佛の信地り保中
ありは高祖聖人所造建の靈場とらふまうりしは國師の舎才
何よりとらふく信地り保中と記すとも真佛の信地り保中

○天明國師の遺蹟とらふまうりしは國師の舎才真徳國春是
をこのり人天明公とらふまうりしは國師の舎才真徳國春是
○是利の學校校地より西梁回より屬以齒學校仁明天皇の所
小御管開基せり聖人先聖の肖像類曾思ふに記の神を
を安し簾簾簾豆の祭と列れ又蕃室と抄しき小房に蕃
格蕃撲の具と記し傍に管の神と安しこれを祭るは傳
て云齒石の從昔管の學問本にして其以まをりて教統とらふ
概はなりしと記し是利義兼これと管業一理真上人と拓法
して附し世に密宗の傍に傳はれぬと記すとも真佛の信地り保中
ありは高祖聖人所造建の靈場とらふまうりしは國師の舎才

又學校建立のついでに上校富貴が企てる所より種々困乏寺の修成呼んでこれに
 降臨してしむるや云仁明の朝堂大僧より降朝し自ら博學多才員て
 てのまゝ六十餘冊の學校を設けんをさうして世にやと國通る人あつて文化
 也都に蒙りしむるや校に同進せしむるもえりてはて後葉や獨
 國の學校のの量の知りあつるを以て唐朝後葉の先聖及び十哲の畫像并樂
 の圖式をとりて翻し書き儒典を傳りて是と云く退轉せしむる校も此況を
 尤もき後葉に及ぶ兵史の學校の基址傳来の畫像を燒失せしを後人
 又其志と傳ふ今の學校を建る者も之を以て是と云く是は畫像を以て
 今も傳へるは莫く天下の公室に之を以て傳はるるは其餘唐
 以前の古書も今人の知る者も之を以て傳はるるは其餘唐
 世の七經並に之を以て傳はるるは其餘唐世の七經並に之を以て傳はるるは
 て美國までもは之を以て傳はるるは其餘唐世の七經並に之を以て傳はるるは
 豈に之を以て傳はるるは其餘唐世の七經並に之を以て傳はるるは
 傳はるるは其餘唐世の七經並に之を以て傳はるるは其餘唐世の七經並に之を以て傳はるるは
 多しは之を以て傳はるるは其餘唐世の七經並に之を以て傳はるるは其餘唐世の七經並に之を以て傳はるるは
 儒書と傳はるるは其餘唐世の七經並に之を以て傳はるるは其餘唐世の七經並に之を以て傳はるるは

○ 尚國の名産・大方紙 那須寺に其外那須寺・漆・布・都宮蓋・國扇
那須寺に其外那須寺・那須寺に其外那須寺

新居山稱名寺

西流 下総國結城より

以下に寺々を順拜の路程のを記し經記傳説よりて其國分の
 例を依て其部を出せり

高梁山法得寺

西流 日國佐野より

野回院宗願寺

西流 日國古河より

慈尊高山勝願寺

左流 日國砥石より

高柳山先了寺

東流 日國中田より

親鸞聖人
 河菫踐
 二十四輩巡拜圖會後篇卷之四終

